幸福への扉

大和武史

幸福への扉

幸福への扉というタイトルを付けてみました。幸福になりたいと願う人々に幸福への道を指し示したいという気持ちからです。

人は誰でも幸福を願っているものです。しかし、実際はほとんどの人が幸福と呼べるような状態ではないと思いますし、中には不幸に近いような状況にある人もいるでしょう。

この本では、そうした人生の途時に降りかかる困難や苦しみ、悩みなどに対してその解決への手がかりを示すとともに、幸福とはどのように手にするものなのかを具体的に解説してみたいと思います。

幸福とは、実は自分の手で掴むものではなくて、自分が他の人々に尽くした愛情が反射して返ってくるようなものなのです。

幸福は自分だけで掴もうと思ってもどうしても掴めないけれども、逆に自分の幸福はあきらめて、同じように幸福になりきれない他の人々を幸福にしてあげたいと尽くしていると、なぜか自分が幸福になってくる、そういうものなんです。これが幸福の素顔です。

まず、幸福になるにはこれを阻害しているものを排除しなければなりません。悩みの解決ですね。これに真剣に取り組まねばなりません。

いずれの場合にもキーは自分の精神的な成長です。自分の心が大きく成長してしまえば、少々のことでは悩まなくなります。そしてそうした穏やかで落ち着いた心の状態になって初めて幸福への扉は開いていくのです。

前置きはこのくらいにして、次から色々な場合について悩みの解決への手がかりを示し

ましょう。そして、その後で幸福の全体像を浮かび上がらせてみたいと思います。

目次

第1章　愛情、恋愛の悩みのために
第1節　男女の恋愛の悩み
1．高校生以下の学生の恋愛
①相手に気に入ってもらえない悩み
②性に関する悩み
2．適齢期の人たちの恋愛
①結婚相手の選択の悩み
②結婚と仕事との両立に関する悩み
3．適齢期を過ぎた人の悩み
①結婚相手が現れない悩み
②老後の不安
第2節　家庭の愛情の悩み
1．嫁と姑の仲が悪い悩み
2．夫婦仲が悪い悩み
3．片親や再婚に関する悩み
第3節　不倫の悩み

1．夫の不倫の場合
2．妻の不倫の場合
第2章　金銭的な悩みの解決のために
第1節　借金の悩み
第2節　貧乏の悩み
第3節　中流から脱却したいという悩み
第3章　肉体的な悩みの解決のために
第1節　自分の病気の悩み
第2節　家族の病気の悩み
①家族の病気そのものが心配で悩みになっている場合
②病気で入院した人の為にお金や仕事などの処置に悩む場合
第3節　死への不安
第4章　仕事における悩みの解決のために
第1節　なかなか出世しない悩み
第2節　仕事がきれない悩み
第3節　好きな仕事に就けない悩み
第5章　教育における悩みの解決のために
第1節　子供のしつけに関する悩み
第2節　子供が理解できない悩み
第6章　神理伝道に関する悩みの解決のために

第１節　家族の妨害に対する悩み
第２節　なかなか伝道できない悩み
第３節　世間の風潮に対する悩み
第７章　幸福への扉
第１節　悩みの克服
第２節　感謝と情熱
第３節　幸福への扉

第１章　愛情、恋愛の悩みのために

第１節　男女の恋愛の悩み

男女の恋愛については、いつの時代も悩みが多いのは事実です。これについて次のいくつかの場合における私の考えを述べたいと思います。これらを参考として、悩みを解決されることを願っています。

１．高校生以下の学生の恋愛

①相手に気に入ってもらえない悩み

まず、高校生以下の年代における恋愛についてですが、最初に相手に気に入ってもらえない悩みについてです。

人間は誰でもこの世に生まれてくると、ゼロからスタートするわけです。赤ちゃんから次第に成長していって、だんだんと大人になっていくわけです。ふつう、２０年くらいかけて成人していきます。

そうすると、今問題にしているこの学生時代というものは、私たちの人生に対してどのような位置づけになるかという事ですね。これをしっかりと認識する必要があるんです。これによって判断が左右されるわけです。

すると、学生時代はその名の通り学生の時代ですから、学業が本業であるという事ですね。これは古い言い方かもしれませんが、いつの時代においても変わらない真実ですね。この時代の人達は、人間としてはまだ成長過程にある人達であり、特に精神的な成長の基礎として、学業というものが設定されているわけです。つまり、知性ですね。これを人並みに身につけないと、社会に出ても通用しないんです。テストで良い点を取るためではありません。自分が成長して、社会に出ても十分通用する人間になるために最低限必要な知識を身につけるという目的です。

ですから、学生時代はまだこれからの数十年の人生に対して基礎を固めている時代であるという事ですね。勉強すること自体は決して面白いものではないかもしれませんが、これは社会に出てからどうしても必要になる知性というものを育んでいるわけです。知性というものは考えるという作業をしないとなかなか発達しないんです。このようにして養った知性で、社会に出ても様々な仕事に適応していくことができるわけです。自分で考えて、仕事の仕方を工夫して効率の良いもの、あるいは効率の高いものにしていくときに出世の道が開けてくるわけですね。こうしたことのための基礎づくりの期間なんですね。

そうすると、自ずと結論は出てきますね。学生時代における恋愛は本業である学業を阻害するようなものであってはならないんですね。この時代に恋愛に悩んでいて全然勉強をしなかったことが後々の人生に暗い影を残すことになるんです。社会に出てからも自分は知識がない、知性が弱いということで引け目を感じて弱々しい人生を歩んでいる人も少なくないんですよ。

知性というものはね、鍛え方です。これによって大きな差が出るんですね。生まれつき

頭が良いのではないんです。遺伝などのせいで生まれつき頭の良さが決まっていると思っていたら大間違いです。要は、考える習性ですね。どれだけ深く、早く、正しく考えられるか、これが問題なんです。これを勉強などを通じて養った人が、頭が良いといわれるわけです。

だから学生時代には、この知性というものを中心として養ってほしいんです。そのために学校教育があるんです。決して無駄なことをしているわけではありません。ただ、その教育内容については必ずしもすべて役に立つものだとも思えませんし、正しいものばかりだとも思えません。ですから、これらの知識をすべて正しいものだとしてテストに良い点を取るため丸暗記するような勉強はなるべく避けてほしいと思います。

必要なものは知識ではないんです。物事を筋道だって正しく考えられることなんですね。これを数学や物理、科学などのように論理的に考えたり、国語や英語、社会などのように言葉や知識を基礎として表現する方法を学んだりしているわけですね。こうした習性を身につけてほしいんです。知識は百科事典やコンピューターがあるんですから、暗記する必要など無いんですね。こうした知識を基礎として応用できる知性を要求しているわけです。これを間違わないでください。

さて、話は戻りますが、このような意味合いが学生の本分ですから、その恋愛は自ずと制限が加わるわけですね。恋愛というのはね、非常に悩みになりやすいんですね。そして、悩みがどうしようもないほど大きくなってしまうと勉強どころではなくなってしまいますね。こうなると、ミイラ取りがミイラになるように本来の目的を阻害してしまって十分に知性を磨くことができず、その後の自己実現が妨げられるわけです。

しかし、恋愛そのものが悪いと言っているのでは決してありません。思春期といってこの年代は始めて恋というものを体験する良い年代なのです。異性を恋し、憧れることにより色々な新しい感情が芽生えてきます。たとえば、慎ましさであるとか、寛容であるとか、美意識など、多くの繊細な意識が目覚めて来るんですね。ですから、結果はどうでも良いんですね。失恋でも片思いでも何でも良いんです。要は、学生時代に自分が憧れた異性がいて、初恋を経験したという記憶が後から思うと宝物のように貴重な経験になるわけです。

ですから、この思春期の恋の悩みというものは避けて通れないと思います。そしてね。本人には悪いですが、こうした初恋に近いような幼い恋は破れた方が実りがあると思います。失恋というものを経験しておくと自分が適齢期になったときに非常に参考になるんです。また、学生時代の恋というものは自分たちがまだ社会に出ていませんから、卒業して社会に出ると環境が一変しますので、消えていきやすいんですね。まあ、ずっとつき合っていて結婚する人もいますが、そしてこれはこれで素晴らしいことではありますが、しかし一般的には社会に出て、大人の環境の中から結婚相手が現れてくる場合が多いと思います。

こうしたことから整理して言いますと、学生時代の恋愛は大いに結構、やった方が良いですが、本業は自分の知性を磨くことにあるのでそれを忘れないこと、そして恋愛の結果は大した問題ではない。自分の結婚相手は適齢期になったら違った環境の中から現れてくるということになると思います。

さて、ではこうしたことを前提としてこの悩みについて考えてみましょう。まず、相手に気に入ってもらえない悩みということですが、これはね、ある程度当然ですね。という

のは、今まで男の子は男の子の、女の子は女の子の仲間の中で生活していたんですから自分の考え方、行動は同姓に対する接し方であったわけですね。ところが、恋愛は相手が異性ですから自分としてもどのように接したら良いのかわからないし、相手もまたわからないんですね。だからわからない同士が試行錯誤で色々やっているんですから、気持ちにズレがあるのは当然なんです。またこうした経験を通して異性という、自分とは全く違う価値観の世界を垣間見るわけですね。これが自分の価値観や関心を広めるのに大いに役立つわけです。

ですから、色々やってみてください。十分に話をしてみたり、手紙を交換してみたり、グループの中で交際してみたり、自分たちに合った方法でやられれば結構と思います。そして、前にも言ったように結果を気にしないように。どうせ学生時代の恋人と結婚する人などほとんどいないんだと思ってあまり結果を恐れないことですね。心がけとしては、相手を理解しようと努めることですね。決して自分を良く見せようとしてはなりません。そんな背伸びをしていると、すぐに疲れますし、そのうちボロが出ます。だから、相手を少しでも多く理解して相談相手になってあげられるような自分になるよう努力することですね。

相手が気に入ってくれないと悩むということは、自分を良く見せようとする心があるという事ですね。だから、その通りにならないから悩みになるわけです。そうではなくて、相手にとって自分が貴重な存在になるよう努力することです。同姓の間とは違った相談相手であったり、勉強を教えてくれる人であったり、手紙や詩、絵画などを一緒に作ってみたりする相手であったり、様々な関係があると思いますから、自分に合った方法でやって

みてください。それに相手も価値を感じたら、仲の良い異性の友達同士になれるはずです。
そしてね、次の性の問題とも関連するんですが、恋人というのはね、決してキスやセックスをする相手ばならないと思わないでください。恋人としてね、特殊なことをしなければという事じゃないんですね。そう思っているんならテレビなどの見過ぎですね。恋や愛というのは気持ちの問題であって、行為じゃないんですね。当然ですね。だから、相手を自分のものにしたいという気持ちは恋愛感情ではありません。間違わないでください。これは相手に憧れて欲望が募っているだけなんですね。本当の恋愛感情というのはね、気持ちです。相手と会っていると幸せな感じが強くする状態であって、行為には関係がないんです。何もしなくても一緒にいるだけで嬉しいという感じですね。そういうことです。欲望に負けて、あるいは興味本位から性行為に進んでしまうと、非常に悩みが多くなりますよ。いろんな葛藤が出てきますね。詳しくは次で述べることにしましょう。

②性に関する悩み

次に性に関する悩みですが、思春期のもう一つの特徴は性に目覚めるということですね。男性はヒゲが生えたり、声変わりしたり、女性は体に丸みがでてきて、生理も始まります。このような体の変化と共に心の方も異性という存在に強く惹かれるようになります。自分とは全く違う価値に目覚めるわけですね。異性の中にある自分とは対称的な魅力に強く感じているわけです。こうして、今までとはまた違った感情を経験して精神的にも成長していくわけです。

このときの性に関する悩みは、性行為をしたいという欲望ですね、この性欲が現れてくることから起きてくるんです。これは善悪の両面があります。この性欲があるから、性行為があり、その結果子供ができて子孫が絶えずに残っていくんですが、反面、性欲に振り回されると人生そのものを壊してしまうこともあります。ですから、性に目覚めると共に人間は新たな十字架を背負うわけですね。性欲という名の十字架です。

学生時代の思春期に限って言うと、この性欲に負けて性行為をすると悪い結果になる場合が多いですね。見つかれば、学校からは退学や停学などの処分が考えられますし、相手の両親からは抗議が来ます。当然、勉強どころではなくなりますから、成績も落ちますし、就職にも差し支えますね。良い結果はほとんど皆無ですね。ですから、この時期にはじっと我慢した方が良いようです。人生というのはね、長いんですね、だからそれを一時の欲望のために棒に振るような行為は避けるに越したことはありません。

ただね、意外に性の悩みで多いのが自分は異常なのではないかとか、性の衝動とは汚らわしいことなのだとか、偏見を持っている人も多いようです。これはね、人間も動物的な本能を持っているんですから仕方がないんだとあきらめることですね。誰でもそうした経験をして大人になっていくんです。本当に異常なら病院に行けばいいし、性そのものを汚らわしいことと思いこむのは間違いですね。そんな汚らわしいことなら神様は男女を創ったりしませんよ。やはり、良きものと思われて創っているんですね。

まあ、特に症状がなければあまり気にしないことですね。そして、そうした暗さを吹き飛ばすように明るく振る舞っていけば良いんです。ケロッとしていればいいんですね。性欲があっても人間だから当然なんだと割り切っていればいいんです。

2．適齢期の人たちの恋愛

次に、適齢期の人たちの恋愛に関する悩みについて考えてみたいと思います。

①結婚相手の選択の悩み

まず、結婚相手の選択に対しての色々な悩みがありますね。そして、これが最も多い悩みであろうとも思います。

結婚ということは、今までの交際ということとはまるっきり事情が違うということですね。つまり、交際の間は遊びですね。余暇の時間を相手と共に過ごしていたんですが、結婚すると家庭にいる間中ずっと一緒にいなければならないわけです。また、期間的にも普通、数十年にも渡る間の長期的なおつき合いになるわけですからお互いがうまくやっていける相手を選択しなければなりません。

このときに問題となるのが、どの相手と結婚すれば幸せになれるかがわからないということですね。この悩みが一番多いと思うのです。

これには、家庭というものの単位で考えてほしいんです。つまり、二人が結婚して新しくできるものは家庭ですね。新しい家庭ができるわけです。この家庭においてより幸福感の多い家庭を作れそうな相手を選択することです。

このためにはね、自分の現在の好みだけではダメなんです。私は面食いだからハンサム

な人だ良いとかだけでは失敗します。あるいは、お金ですね。お金持ちなら良いとかいうのもまずダメですね。なぜなら、結婚して家庭に入って長い間つき合うことを考えていないから、結婚後いろいろな気に入らないところが出てくると、その欠点で良い点を打ち消してしまうことになります。プラスマイナスゼロかあるいはマイナスになってしまいます。この結婚は失敗だったと思い始めます。

ですから、自分の性格というものをよく考えて自分と一緒に家庭を作ると良い家庭ができそうな相手を選んでほしいのです。たとえば自分が内気で内向的な人なら、相手もそんな人なら家庭はどうなるでしょう。たぶん、ひっそりとした家庭になり、その子供たちも内気で元気のない子に育つでしょう。だから、こういう場合は逆に相手は活発でエネルギッシュな人を選択した方が良いわけですね。この逆もありますね。二人とも出たがり屋だと落ち着きのない家庭になりますし、子供もそういう子に育ちますから、相手は落ち着いてドンと構えたような人が良いわけですね。

こうしていくと、お互いの欠点が補われていくわけですね。そして、長所が消えていくかと思えばそんなことはありません。長所は長所でちゃんと両方の中にありますから、欠点を補いながら長所を生かすような形になるわけです。このときにね、自分の長所を阻害するような人でないことも必要ですね。たとえば、自分の長所は明るくさっぱりとしていることだとすると、相手と会っていても話が全然合わず、黙り込みがちになる相手であっては自分の美点が消えてしまっているわけですね。これではいけないわけです。相手に自分の良いところを自然に見せられる人が良いのです。こうした夫婦の良いところが全面に出ている家庭はね、子供の成長には非常に良い環境なんですね。子供は親の影響を強く受

けますから、お互いの美点が輝いている家庭はすばらしい子供を作ることが可能ですね。

次に、一番大切な心構えを言っておきますと、自分の心構えとしては相手をより幸せにできる人を選ぶということです。なぜなら、新しい家庭を幸せなものにしようとするならね、この家庭には幸福感がなければいけませんね。この幸福感は自分のものだけではダメでお互いの幸福である必要があります。でも、残念ながら自分が幸福になるかどうかという点は非常にわかりにくいんですね。なぜなら、相手の結婚後の態度や待遇やその他いろいろな要因で変わってきますから予想が難しいんですね。「どの人が自分を一番幸せにしてくれるか」という視点で見ると全然わからないですね。それが普通なんです。

でもね、ここで視点を変えて相手を幸福にしてあげられそうな人を選んでほしいんです。なぜならね、この家庭が幸福であるためには相手も幸福であるはずですね。自分の幸福は外因によって決定される部分が多くてわからないのですが、相手の幸福を決定する部分の多くを自分が占めているわけです。だから、自分がどれほど相手を幸福にしていこうかという気持ち次第で相手の幸福は大きな差が出るわけですね。やはりね、幸福というものは偶然、そうなるものではないわけですね。家族を幸福にしたいと思って行動する人があって初めて可能なんです。家庭を幸せなものに、楽しいものにしていこうと努力していくところに築かれていくものなのです。

結局、結婚の相手としてはまず、自分の性格をよく観察してみて良い点、悪い点を認識してください。そして、その欠点を補えるような長所を持つ異性でかつ、自分の美点を損なうことのない人をリストアップしてください。そうして、最後にその候補者の中から自分が配偶者となって相手を一番幸福にしてあげられそうな人を選んでほしいと思うのです。

こうして選ばれた相手はね、８０％以上の確率でいわゆる運命の赤い糸で結ばれた相手だと思いますよ。

これはね、真実なんです。読者の皆さんがどれだけ信じているかわかりませんが、この世と呼ばれる世界の他に現実にあの世と呼ばれる生命エネルギーの次元の世界があるわけです。そして、私たち人間の本質はこの生命エネルギーなんですね。この生命エネルギーが肉体という衣をまとってこの世という物質の世界の中で特異な体験をしているのが現在の私たちの本当の姿なのです。そして、何度も何度もこの世に生まれては死に、あの世に還り、またこの世に生まれるという生命の循環をしているのです。これが輪廻転生ということですね。

実はこの霊界において、私たちが今回の人生についてある程度の人生計画を立てて来ているのです。そして、この計画の中には自分がどんな両親の元に生まれ、どのような環境に育ち、誰と結婚し、誰を子供として育てるかということも計画の上で生まれてきているのです。ただ、結果はそのとおりいくかどうかは分かりません。結果はやってみなければわからないんですね。それは、本人の選択や周りの影響などによって計画からズレが生じる場合があるからです。しかし、どんな人でも必ず人生計画というものを持って生まれてきています。この中には仕事や家庭のことも当然入っています。

こうした計画通りに人生を歩むということがその人にとっては理想的な人生であるはずですね。だから、本当はこの筋書きを知らされているといいんですが、それでは努力も進歩もないわけですね。答えを知らないから試行錯誤が始まり、努力が続けられてうまくいけば問題を解くことができる実力が養えるわけです。だから、この世ではあの世の記憶や

過去、自分がこの地上に生まれた記憶などは一切消されての誕生となります。一種の修行なんです、人生というのは。そうすると、非常に難しいですね。誰かがアドバイスや指導してくれないとなかなか予定通りにはいきません。

そのために、守護霊というものが誰でも例外なく１名はついているんです。この守護霊というのは、普通本人の魂の兄弟とも呼ばれる霊で他人の霊ではありません。人間には潜在意識と呼ばれる意識が存在することは皆さんご存じでしょう。この潜在意識はいったいどこにあるんだと思いますか。頭の中や体の中にはないんです。そんなところにあったら潜在意識ではなくて、顕在意識になってしまいます。これこそが実は守護霊と呼ばれる部分に他ならないんです。この世ではない生命のエネルギーの世界の自分自身の意識があるわけです。つまり、私たちは肉体に宿るとき、全体の１０％から２０％の部分の生命エネルギーを使って生まれて来るんです。残りはちゃんと霊界に存在しているんですね。こうした部分が守護霊を努めて地上に出ている自分を導くわけです。

ですから、人生計画に決めた結婚相手にはこの守護霊が普通は必ず会わせてくれます。何らかの形で会わせてくれますから、後は本人がその人を選ぶかどうかですね。まあ、もちろん相手も選んでくれなければなりませんが。でも、普通はお互いの守護霊の導きにより結ばれるのが普通なんです。なぜならね、この相手というのはね、やはりね、本人とよく合うんですね。性格的にお互いが非常に魅力を感じるんです。当然ですね。あの世において既に結婚の約束をした仲なんですから。そうした相手ですから、きっかけさえできれば、自然と結ばれる場合が多いんです。

しかし、あの世で約束した相手だから幸福になるとは限りませんよ。これはお互いの想

いや行為によって決まるんです。それが幸せを呼ぶようなものなら幸福になれるし、そうでない場合は不幸になります。原因と結果の法則ですね。この厳密な法則の下にあるんです。こうしたこともね、参考として、覚えておいてほしいと思います。

②結婚と仕事との両立に関する悩み

次に、結婚と仕事との両立に対しての悩みですね。これは、最近女性が社会進出をするようになってきて特に増えてきたのではないでしょうか。お相撲さんと女優が婚約までして女優が仕事を続けるかどうか否かで話がまとまらず、婚約破棄したカップルもいましたね。仕事をとるか、結婚をとるかという問題になると非常に悩みが多い人もいるんではないでしょうか。

これはね、一概にどちらを取るべきだとは言える問題ではありません。やはり、ケースバイケースなんですが、用はお互いの理解ですね。これによるわけです。お互いが相手の事情や気持ちをよく理解した上で、お互いにとって良いと思われる方を選択するしかないですね。このときにね、特に男性は女性の仕事を軽く考えてしまう傾向がありますから気をつけてください。女性の仕事は生産という面においては、確かに男性より見劣りするようなものが多いでしょう。しかし、効果という面では男性の仕事を凌駕する場合もあるんです。たとえば、身近な例では紅一点という言葉もあるように男中心の仕事場においての潤いと言いますか、安らぎみたいなものを提供する女性もいます。仕事量がどうのこうのということでなく、存在そのものが貴重というような場合ですね。ですから、自分の尺度

でばかり考えてはいけません。また、周りの人たちの意見ばかりに従ってもいけません。

要は、お互いの気持ちですね。これを尊重してほしいんです。そして、どうしても一方が仕事を辞めなければならないとしても、相手の気持ちを十分に尊重して無理強いしないことですね。そして、自分にできることがあれば何なりと埋め合わせはするという気持ちも必要でしょう。相手の犠牲の上に成り立つ結婚であるならば、その犠牲に対して必ず報いるよう努める必要があります。何があっても相手を幸せにするという気持ちですね。これが大事です。

この気持ちが本当に相手にあるときにね、結婚を蹴って仕事を選ぶような人は幸福な結婚生活というものからは縁遠い人だと言わざるを得ません。前に結婚相手を選ぶ悩みのところでお話ししたように、この相手を幸せにしようという気持ちが最も貴重なんですね。これを自分に対して持ってくれているんですから、後は自分も相手を幸福にしようと思えば良いわけですね。そうすれば、幸福な家庭の条件が整うわけです。後はこの気持ちを持続できるようお互いが努めるだけです。

3．適齢期を過ぎた人の悩み

次は、適齢期を過ぎても結婚できない人にアドバイスをしたいと思います。

①結婚相手が現れない悩み

まず、結婚したいのに相手がいない、あるいは結婚にどうしても踏み切れないという悩みについて参考となることをお話ししたいと思います。

本人に結婚の意志があるのに結婚相手がどうもいないという場合には３つの場合が考えられます。１つ目はいわゆる結婚する約束をしてきた相手が、何かの事故などで死んでしまったりして会えない場合です。２つ目は、過去世において自分が結婚相手を粗末に扱い不幸にしたような場合において、その業（カルマ）の刈り取りのために今世においては結婚したくてもできない境涯におかれる場合もあります。３つ目は、本人が優柔不断で決断力がない場合です。

それぞれについての対処策をお話ししておきますと、１つ目のあの世で約束した相手が事故などで現れない場合ですね。これは現在でも間々あるようです。たとえば交通事故などですね。こんな交通事故で死ぬことを計画して生まれてくる人など一人もいませんから、こういう事故にあって死んだ人は予定が狂ったということになります。当然、結婚する予定の相手にとっては相手が現れないということになりますね。でもね、こんな厳しい時代ですから普通の人は予備と言うと失礼ですが、第２候補、第３候補くらいを約束して来て

います。ですから、守護霊がそうした人たちとは会わせてくれると思います。

ただ、もうちょっとどこか物足りないなという感じがするかもしれませんね。これは第2候補ですから仕方がありません。適齢期ならいざ知らず適齢期を過ぎて結婚するんですから無理は言えません。まずまずであれば良しとしなければなりません。後はお互いが努力して幸せを築いていけばいいんです。幸福になってくれれば、相手は自然と変わってきます。幸福な家庭というものは二人で育てていくものなんです。

ですから、適齢期を過ぎてから結婚しようとする人は、もうあれこれ条件をつけることはできないと思って下さい。そんな自分にとって理想的な人はやはり他の人にとっても素晴らしい人であるはずですし、そうした素晴らしい人が他の若い人より適齢期を過ぎた自分を選んでくれるという事はほとんどあり得ないと思わなければなりません。だから、100点満点中、60点以上なら善しとして後はお互いの努力で素敵な関係を築いていく事です。

やはりね、人生というものをトータルで考えると結婚はできればした方が良いと思います。元々、神が男と女を創られたのはお互いに助け合っていきなさい。と、言われているからなんですね。一人の生活では味わえない潤いや喜びがあるんですね。せっかくの人生ですからできれば結婚して家庭を造り、子供も造って欲しいと思います。こうした経験はやはり自らの精神的な向上にとっても貴重な体験であると思います。もちろん、結果はわかりません。結婚したけど失敗して惨めな結果に終わるかもしれません。しかし、何不自由無い天国の世界からわざわざこの世へ困難を覚悟で生まれてきている私達であるならば、チャレンジするしかないんじゃないでしょうか。人生そのものがチャレンジなんです。ならば、カ強く歩んでいくだけですね。

次に、2つ目として過去世のカルマの刈り取りのために結婚できない場合ですね。まあ、数は少ないでしょうが、こんな人も現実にいます。これは、自分が今回この世へ生まれる前にこの世へ生まれた時に、相手を非情に虐待したか、不幸な目に会わせたかでこうした事がカルマとして残っている場合、こうした悪い傾向性を修正する事を目的として今回、結婚したくてもできず、結婚して家庭を造るという事がどれほどありがたい事であるかを身を持って体験させられる場合もあります。

このような場合においては、結婚できないのは当たり前ですね。あの世で守護霊が一生懸命妨害しているんですから。うまくいきそうになっても、何か邪魔が入ったりしてどうしてもうまくいかないと思います。これは、こうした体験から悟れと言われているんですね。過去、自分が愛という感情をあまり抱いた事が無かったんではないでしょうか。そうした愛を相手に与えようとしない人が結婚しても相手は幸せになれるはずはありませんね。そして、それどころか事ある度に相手を責めたり、叱ったりして傷つけてしまうのではないでしょうか。こうした傾向性を持つような人は、守護霊が意図的に結婚させない場合があるんですね。なぜなら、結婚して過去世と同じように相手を不幸にしたら、今回の人生そのものが失敗になるからですね。同じ事の繰り返しではいけないわけです。このために、今回はどうしても結婚できないような状況の中で反省の機会を与えようとしているわけです。

この時には、もう早めに悟るしかありませんね。早めに悟って自分の悪い傾向性に気づき、修正しようと努める事です。これ以外にありません。この反省が十分できれば、よくぞ悟ったということで、褒美に結婚できるようになるかも知れません。しかし、その場合はこ

の結婚生活でまた相手を不幸にする事が決してないようにしなければ意味がありませんよ。もう一生奉仕のつもりで相手の幸福のために身を粉にして働く事ですね。これができれば、悪い傾向性の修正という事がまずまずできたということ、つまりカルマの刈り取りができたということになります。

そして、こうした場合の相手というのはほとんどの場合、過去世で自分が不幸にしたその相手である場合が多いんです。信じられないでしょうが、本当です。ですから、自分と同じように相手もカルマの刈り取りをさせられているわけですね。前回、不幸にされた相手とまた結婚して今度はお互いが協力して幸福な家庭を造る事ができるか、それを試されているわけです。こんな事が現実にいくらでもあるんです。

三つ目は優柔不断でどうしても結婚に踏み切れない場合ですね。これも結構あるようです。こうした人は二通りあると思います。一つは性格的に決断力が無い人ですね、もう一つはその人の頭の中に何か気になる事があってどうしても踏み切れないという人です。

前者の決断力の無い人はね、やはり取り越し苦労のタイプの人が多いんではないでしょうか。結婚してね、自分はきっとこき使われるのでないかとか、あるいは貧乏に困って乞食同然の暮らしをさせられるのではないかとか、あるいは相手に浮気されて離婚するのではないかとか、色々な事を想像しては悲観するタイプですね。こういう人だとなかなか結婚に踏み切れないのは当然ですね。また、こうした想いの人が踏み切って結婚しても自分が想像したような不幸な結婚生活を歩む事も多いんです。なぜならね、心の中の深いところでそうした自分の不幸な姿を認めてしまっているからなんですね。

このように自分の将来を悲観して生きている人は、自分にそのような場面が現れてくる

と、「やはり自分は不幸になるしかないんだな。」と簡単に不幸を受け入れてしまうんです。「どうせ自分は幸福になれないさ」と思ってしまえは、幸福になどなれるわけがないですよね。たとえ、何か良い事が起こりそうでも、「自分にこんな良い事があるわけがない。」と思ってそれを拒否してしまう人もいるんです。たとえば、自分が憧れていた人が結婚を申し込んでくれたとしても、「私など相手にするわけがない。からかっているに違いない。あるいは、財産目当ての結婚に違いない。」とせっかくの話を断ってしまう人もいるんですね。

結局ね、自分の幸福な姿を心の中に描けないような人はね、幸福にはなりきれないんです。私達の想いというものは大きな力を持っているんです。絶えず明るく幸福な想いを持ち、行為をする人は幸福になるしかないんですが、逆に暗い、じめじめとした想いで生きている人にはね、幸福は避けて通るんです。

幸福な想いを発する人には幸福な結果が、不幸な想いを発する人には不幸な結果が来るようになっているんですね。因果応報の法則ですね。自分の日々の想いが幸、不幸を分けるんです。現在のように、適齢期を逃している原因も自分の不幸な想いが原因となっているのではないでしょうか。

次に、後者の何か気になる事柄があって結婚に踏み切れないという場台ですね。これは、その懸案事項の内容によって答が異なるので画一的な解答は出せないんですが、参考となる事だけ言っておきます。まず、自分がその懸案事項を思うときの気持ちを確かめて下さい。この時の気持ちが、「結婚したいけれどもできない。」という種類のものであるなら思いの転換を図って欲しいと思います。何々しなければならないという気持ちは実は情神

的な束縛に他ならないんです。「あなたは一人子だから養子を取らなければならない。」とか「おまえは長男だから家を継がなければならない。」とかいう事は世間にはいくらでもあります。そして、親というものが絡んでいて、できれば親の意向に添ってあげたいとは誰でも思うものですから、放棄する事もできず、されど気持ちとしては従いたくないという事で悶々とする人も多いと思います。

こうしたたぐいの問題の時には、気持ちの上では切ってしまうべきだと私は思います。こんな事を言うとね、親不孝だと叱られるかも知れませんが、でも親というのは子供に面倒を見る事を強制してはならないと私は思うんです。なぜならね、両親は昔、自分達が好きで結婚して自分達の意志で子供を作ったんですね。ですから、親として愛情をかけて育てたという事です。そこには、純粋な愛情の行為があるだけで契約のようなものはなかったんです。まあ、中にはね老後の面倒を見て貰いたいから育ててきた人もいるかもしれませんが、これは考え違いをしているんであって子供を作ったのは自分達なんですから大人になるまで育てるのはその責任を取るという事なんですね。そしてね、こうした家庭を持ち、子供を育てるという事自体が両親の人生の課題でもあるわけです。決して子供に恩を着せるために育てるのではありません。ですから、本来は親は親、子供は子供なんです。

寂しいかも知れませんが、いつまでも子供を束縛していると子供は羽ばたけないんですね。ですから、基本的には親は自分で老後は何とかするように考えておかなくてはなりません。子供の方は自分の幸せというより、これから新しくできる家庭と生まれてくるであろう子供の幸福を中心に物事を判断していかなければなりません。たとえ、形の上では親に冷たい仕打ちとなるような場合であっても。なぜなら、親というのはあとどれだけかで

先に死んでいくんですね。でも、子供はこれから私達が死んだ後も生きていくんです。先へ先へと愛は引き継がれていくべきなんです。親から子へ、子からそのまた子へと愛情は受け継がれ守られていくんですね。だから、親として自分の老後の事ばかり考えている人は、一種のエゴイズムですね。自分中心に物を考えているわけです。

次には、工夫ですね。このような気持ちであって良いわけですが、親子の縁を切るように飛び出してきたんではいけないわけです。なぜなら、その親というのは赤の他人ではないからですね。自分を数十年育ててくれた恩人でもあるし、今までに多くの愛情を受けて現在の自分があるわけですね。だから、冷たく突き放すような事はできない。しかし、結婚しなくてはならないという事で非情に悩みが多いんですね。この時にね、事態を何とか丸く治めるには工夫しかないんです。なるべく近い所に住むとか、度々尋ねて来るとか、工夫して和らげるしかないですね。できる範囲で尽くしてあげることです。恩人なんですから。でも、最後は新しい家庭と子供の為に決断することですね。なんだかんだと言っても親は子供の幸福を願っているものです。子供が幸せになるのならと諦めてくれるでしょう。そして、こうした経験も彼らにとっては意味のある事なんです。自分の利害を捨てて、子供の幸せを願う、これはある意味で悟りなんですね。これができる事が霊的な進歩なんです。

②老後の不安

次に、適齢期を過ぎて結婚できず老後が不安だという悩みですね。これは、ある意味で

は仕方がないです。あえて受け入れて下さい。一人切りの老後にそんなに楽しい暮らしがあるわけもありません。ですから、できるなら結婚して欲しいんですね。それを敢えてしないか、できない以上、寂しい老後となるのは一応、覚悟して欲しいと思います。

でもね、必ず悲惨な暮らしになると限っているわけではありません。本人の生き方次第でいくらでも道はあります。たとえばね、身体障害者の方には結婚したくてもできない方も多いでしょう。こうした方に待っているのが一人切りの不自由な老後の暮らしだったらあまりにも寂しいですね。神様はね、そんな無慈悲な方ではありません。道は必ず用意されているんです。それに気づくかどうかです。

私がお薦めしたいのは、特にある程度の年齢になれば自分のために生きるのは止める事ですね。他人様のために、世間のために微力ではあるが何らかの力になりたいと努める事です。老人に一番求められているものが何だかわかりますか、それは生き甲斐なんです。彼らはね、もう何十年かの人生を生きてきて後残り少なくなっているんですが、人間というものはね、生きている証みたいなものを感じられないとね、生きている気がしないんですね。生き甲斐を見つけると言うことですね。

この生き甲斐は、相手が多ければ多いほど良いはずですね。趣味のようなものでは自分一人が対象ですから自分が飽きてしまえば生き甲斐も消えるんですが、多くの人々に頼りにされる生き甲斐なら消えることはありませんし、本人もやる気が倍増しますね。自分が今までの人生で身につけた特技や教訓を若い人達に教えてあげてほしいんです。たとえば、身障者で耳が下自由な人なら手話を教えてあげたり、あるいは車椅子の上手な扱い方をアドバイスしてあげたり、何でもいいんです。自分の経験から学んだ事でみんな

に役に立ちそうな事を教えて欲しいんです。あるいは、教えるような事がなければみんなの役に立つような事をやらして貰えば良いと思います。

特に、身体障害者の方はねこうした事が大切です。なぜなら、自分が大人になるまでに多くの人達の援助を受けてきたはずですし、迷惑もかけてきたはずです。こうして大人になっても、自分だけの事しか考えないで生きている人はね、この身体障害というハンディを克服する事は難しいでしょう。絶えず、自分は恵まれない、不幸な人間だという想いが頭を離れる事はないと思います。このままで死んだんではこれを克服した事にはならないんですね。身障者であるけれど、普通の人と同じように、いや普通の人以上に明るく、純粋に生きてこそ、克服したと言えるんです。

この意味がわかりますか。つまり、身障者はこうした十字架を背負わされる事により試されているわけです。何不自由ない環境で純粋に生きる事は比較的簡単でしょう。

しかし、身体障害という厳しい境涯の中でどれだけ輝いた人生を生き切れるかを試されているんですね。これにはね、お手本もあるはずですね。たとえは、ヘレン・ケラーや現在アメリカで活躍中のホーキング博士などですね。この方達は、身体障害というハンディを克服して、なお普通の人以上の業績を残されていますね。ここまでは要求はしませんが、少なくとも自分の境涯を呪う気持ちがある間は勝利はないんです。境涯に負けているということに他ならないんです。

まず、受け入れる事てす。これは、神様が自分の精神を強くしてくれるために与えられた試練なんだと。次に、人間は死ねば何もかも終わりではなくあの世に還るだけであり、あの世の天国には病気や身体障害などあり得ないことを知って下さい。こうした人連であ

っても天国に還れば自由自在なんです。本当です。しかし、地獄にはありますよ。あの世は想念の世界ですから、自分の心が病気や障害を抱かえたまま死ねば病人や障害者となってしまいます。しかし、これらを気に留めなければ、自由な姿に帰れるわけですね。

さあ、後は世の中に対して自分がどれだけ役に立てるかやってみるだけです。この時の評価は普通の人が同じ事をやった場合の数倍に匹敵します。先ほどのホーキング博士でもそうですね、世界中に彼くらいの科学者はいくらでもいるでしょう。でも、彼があれほど人々の注目を集めるのは身障者であるからに他なりませんね。ですから、同じ事をやっても価値が高いんですね、普通の人よりは。この点が有利な点です。だから、これを利用しない手はないんです。どうぞ実行してみて下さい。必ず素晴らしい人生が開けてくるものと信じます。

身障者に絞ってお話しましたが、普通の高齢者についても同じ事です。

第2節　家庭の愛情の悩み

1．嫁と姑の仲が悪い悩み

嫁と姑との問題は、昔から様々な家庭問題を引き起こしてきました。まるで犬猿の仲のようにいがみ合っている人達も少なくありません。ここでは、この問題について考えてみましょう。

まず、嫁というのは姑から見れば息子の配偶者ですね。そして、結婚するまでは主とし

て母親が面倒を見てきたわけですね。これが、嫁を貰うと嫁が面倒を見るように変わります。ですから、今まで自分の仕事であった息子の世話という仕事を譲るわけです。次に、息子の方の態度ですが、これは結婚すると母親にはどちらかというと冷たく、あるいは厳しくなるのが普通なんです。

なぜならね、結婚前は親と子だけの関係ですね。でも、これに夫婦の関係が入ってくると、どちらも非情に深い関係ですがどちらかといえば夫婦の関係の方が深いわけですよね。そうすると、男というものは本質的に単純にできている部分があって、この家庭の状況の変化が母親に対する接し方に微妙に反映されるんです。今までとはどうしても少しよそよそしくなるんです。一方、母親の方はこの息子の変化を敏感に感じとるんですね。

こうして、母親の方には息子の世話という仕事と息子の愛情の二つを嫁に奪われたという被害感情が芽生えるわけです。

問題はね、この時です。この時にこれをどのように考えるかという事で結果は大きく違って来るんです。普通は、嫁に対する反感ですね。これが一番問題に発展するパターンですね。家庭の中において色々ないさかいを通じて憎しみ合う結果となっていきます。こうなってくると、なかなか解決は困難になっていきます。

それで、ここにおいて推薦したいのは、家庭からの開放です。つまり、母親というのは自分達が結婚して新しい家庭を築いて子供を作り、現在まで家事と家族の世話を一気に引き受けていたわけですね。家庭にどっぷりと浸かっていたんですね。ある意味では家庭に縛られていたわけです。それが、息子が嫁を貰うようになるとかなりの部分を嫁がやってくれるようになりますから、自由な時間が多くなるわけですね。これをね、息子を奪われ

たなどと思わないで家庭から開放されたととらえて欲しいですね。

そして、一番重要な事はこの自由な時間を何に使うかという事なんです。この使い方がほとんどの人は下手なんです。それほど熱中するような趣味もないし、お金のいるような事ばかりもしていられないし、する事がないんですね。仕方がないんで、外へ働きに行ったりするわけですが、そうするとほとんどの場合、家事より仕事がきついわけですね。すると、嫁が来たばっかりに歳取ってからこんな苦労をするようになったと考えてしまうんです。

ですからね、私が言いたい事は「もう自分のために生きるのは止めなさい。」という事なんです。自分の息子が嫁を貰うまでに成長したんですから、もうある意味で自分の仕事は終わったわけですね。そしたら、後は恩返しに生きる事です。家族や世間への奉仕の人生と割り切る事です。これをいつまでも自分中心に物事を考えているから嫁に立場を奪われて悔しいと思うわけですね。そうではなくて、「もう自分の仕事は終わった。これからの余生は家族や社会への奉仕へのつもりで無私に生きよう。」と考えて欲しいんです。

では何故、奉仕のつもりで生きると良いのか説明しましょう。まず、嫁に対してですね、自分の仕事を取られたというような気持ちではなくなりますね、嫁が家事を引き受けてくれるおかげで自由な時間ができると思えば、逆に感謝の気持ちさえ湧いてきます。嫁に対する反感が消える、これが一つですね。

二つ目に、もうこれからは自分はだんだん家族から離れてくるという事です。ですから、家族からの阻害感が強くなっていくんです。その時にこれを打ち破っていくには、新しいニーズを作るしかないんですね。自分の新しい必要性ですね。そうしないと、家族からだ

んだん取り残されていきます。この新しい必要性は家族にとって、自分が必要という事ですから家族に奉仕するという事は一番手っとり早い方法なんですね。ただ、家事の横取りにならないような注意は必要でしょう。人のやり残した事を自分が積極的にする事です。無私の気持ちで。

三つ目にはね、自分自身の精神的な向上という事ですね。この家族や世間への奉仕ができるという事は明らかに人格的には向上しているんです。自分だけの利害を考えている段階は、例えて言えば小学生です。これにね、家族や子供などを責任を持って育てる段階が中学生くらいでしょうか。現代の普通の人はここで終わるんですが、これを先ほどのように奉仕の気持ちで尽くすと義務教育を卒業して高校や大学のレベルに入るわけです。人間として、かなりの徳が身についてくるわけですね。これが天国への鍵になりますし、自分自身の幸福にもなります。現代では見失われていますが、人生の王道なんですよ。

以上が姑の側から見た問題なんですが、今度は嫁の側から見た問題について考えてみたいと思います。

最近の嫁は昔とは違って非常に大切に育てられていますので、ある意味で忍耐力がないんですね。何か辛いことがあると、すぐに実家へ帰ってしまう人も多いようです。結局、気持ちが転換していないんですね。まだ、実家で娘として育った延長でいるわけです。実家の両親も、「何かあればすぐに帰っておいで。」と言って送り出していますから余計ですね。

ですから、心の中にはいつでも帰ってやるというような気持ちで姑にも接していますから衝突も多くなりますね。嫁は新しく家庭に入ったらね、実家とは縁が切れたと思って欲

しいですね。そのくらいの気持ちでないとなかなか丸く収まらないですね。「もう、自分には帰る家はない。ここが私の家なんだ。」と新しい家庭に全力を尽くすことですね。この気持ちが無いと、なかなかうまくいかないんですね。幸せな家庭というのは家族が力を合わせて作っていくものなんです。だから、いつまでも実家に未練を残していたままでは何か困難がくると、すぐに挫折してしまいますね。耐えるという気持ちが薄いからです。

姑に対する接し方としては、他人と考えるのは止めるべきでしょう。夫の母ですから、自分の母ですよね。急に実家の母と同じように接することも無理でしょうから、夫の恩人と思われてはどうでしょうか。夫を現在まで育ててくれた人ですから、当然恩人ですね。夫が大変世話になった人として接して欲しいと思います。そうすると、少し低姿勢になりますね。このくらいでないとなかなかうまくいかないんですね。やはりお互いが対等と思っていては喧嘩が多いですね。

でもね、言いたいことも言わず我慢しろと言っているのではありません。礼儀を忘れるなと言っているんですね。喧嘩というものはね、同じ土俵の上にいるからこそできるんですね。姑は夫の母として、自分とは線を引いてしまうことですね。服従するのではなく、争わないということです。「夫の恩人なんだから。」と争う気持ちを収めることです。意見は意見として、はっきり言えばいいと思いますが、争いはいけません。争いでは何事も解決などしません。

あと、家事についてはもちろんどんなスタイルでも良いわけですが、嫁のほうに主権があるほうがうまくいくようです。嫁は、主婦として家庭を任されていると思うべきでしょう。責任をもって夫や子供達を預かる必要があります。まあ、後はね、夫と手を合わせて

頑張っていくだけですね。家庭にとっては、夫と共に大黒柱ですから、くよくよせず強く生きていくことです。

このように、姑も嫁もお互いの考えを少し変えるとかなり調和された家庭が築けると私は思いますね。

2．夫婦仲が悪い悩み

今度は夫婦の仲が悪い場合ですが、この場合はきついですね。なぜなら、夫婦が家庭の基盤ですからこれがうまくいかないという事は致命的ですね。幸福な家庭など望むべくもありません。ぜひとも仲の良い夫婦にならなくてはなりませんね。

まず、原因として考えられるのは、一つは性格的に合わないという場合ですね。次に、お互いの理解が十分でない場合です。そして、最後には何か障害になる事柄があってこれが支障になっている場合です。

最初の性格的に合わない場合についてですが、こういうカップルも時々あるようですね。もちろん、結婚する前はそんなに気にならなかったんでしょうが、結婚して環境が変わるとやたらと相手の欠点が目につく場合があります。特に恋愛結婚に多いようですが、ある意味で冷静に相手を見れるようになってきたんだと思います。あるいは、相手が結婚によって急に態度が変わってしまう場合もあるようですね。いずれにしても、結婚という事は現実の生活をどうしても伴うものですから、夢と違った結果が現れてくるのは仕方がありません。結婚生活というものはそんなに楽しい事ばかりあるわけではありません。ほとん

どが平凡な毎日の連続なんですね。この平凡な毎日の中に幸福を醸し出さなくてはならないんですね。

さて、ここで問題としているのは性格的にどうも合わないと思う場合ですね。この場合も本当に合わない場合もありますが、そうではなく思い違いの場合も多いんです。というのはね、先ほども言ったように結婚前に結婚生活をあまりにも理想化し過ぎていると、現実の平凡な毎日がたまらない場合があります。これは、自分が甘い結婚生活を夢見ていたのに相手は現実的な態度ばかりする場合とか、逆に相手が思ったよりも生活がだらしない場合などいろいろな場合があるでしょうが、いずれの場合においても言えることはお互いの忍耐不足ですね。

結婚生活というのは、他人同士の同居と同じですから生活習慣や生活態度など異なっていて当たり前なんですね。自分の以前の家庭の習慣から考えると、違和感があっても仕方がありません。しかし、それはお互い様ですから、あまりすぐに指摘し合いしない事ですね。しばらくは、じっと耐える事も必要です。なぜなら、相手のこういった習慣は長い年月の間に身についたものであって、そんなに急には直らないからです。お互いに相手を認め合ってしばらくは耐える事です。そして、家庭に調和ができてくれれば自然と新しい習慣ができてくるものです。争いの基を作らないという事ですね。これが大切です。

このように努力して調和に努めていくと、意外に合わないと思っていた相手でも合うようになってくるんですね。不思議ですが。ですから、性格が合わないとすぐにあきらめてしまわないでしばらくは耐えて、調和を図って欲しいんです。すると、意外に道が開けてくる場合もあります。縁があって結婚した二人ですから、何とか努力で新しい調和を作る

べきですね。離婚などいつでもできますが、こうした努力は離婚してからはできないんです。後で悔いのない様に全力を尽くしてみてはいかがでしょうか。それでもどうしてもダメだったら別れればいいんです。

さて、二つ目のお互いの理解が十分でない場合ですね。この場合に言える事は、お互いが接触できる時間を最大限に有効に活用するべきです。その方法としては、相手を理解しようと努める事ですね。そして、気持ちとしてはね、自分の側で理解するのではなく、相手の側から家庭が、あるいは自分がどのように見えているのかを考えてみる事です。人間というのは勝手なもので、相手の欠点はすぐに気がつくのですが、自分はまるで見えない事が多いんです。相手の欠点や態度ばかり気にする前に、相手が物事をどのように感じているかを考えて欲しいんです。そうすると、その原因が意外に自分の方にあったりする事も多いですよ。

これが本当に相手を知るという事なんですね。相手の感じ方、考え方がわかるという事です。ここまでいけばね、少々の事があっても乗り切っていけると思います。夫婦の仲の根底にあるものはお互いの理解に他ならないんです。努力してみて下さい。

最後に、何か障害がある場合ですね。この障害にはいろいろなものがあるでしょう。たとえば、姑の問題とか、子供の問題とか、お金の問題とか、近所つきあいの問題とか様々なものが考えられます。しかし、いずれの場合においてもこうした事は家庭をよりしっかりとしたものにするように神様が与えてくれた試練であると考えていただきたいのです。何の障害もない家庭などいまだあった試しもありません。こうした障害に夫婦が協力して、乗り越えていく時に家庭というものは強く結ばれていくものなんです。ですから、自分達

に与えられた問題集だと思って取り組んでいただきたいと思います。

このときのポイントは夫婦や家族の信頼ですね。これを決して壊さない事、これが大切です。こうした障害は、この家庭の信頼感を試されているんだと思っていただいて結構です。どんなに事態が悪化しようと、最後まで家庭の絆を守り通す時に勝利は訪れるしかないんです。たとえ、形の上では惨めな結果が現れようとも、気持ちの上で家族がしっかりと結びついていれば、いつでもやり直しができますね。勝利したのと同じ事なんです。貴重な経験をしたと思えば良いですね。

以上、簡単にポイントだけをお話しましたが、夫婦の絆は家庭の要ですからどうかしっかりと素晴らしいものにしていただきたいと思います。

3．片親や再婚に関する悩み

次に、不幸にして配偶者が亡くなってしまった場合ですね。再婚しなければ、子供にとっては片親になりますし、再婚となると色々な問題が発生してきます。主として再婚した方がいいのかどうかという問題になると思います。

これにはね、そのときの年齢が大きな要素になります。そうですね、３０代までなら再婚できるなら再婚した方が良いかも知れません。なぜなら、このくらいの年代だとまだまだ子供が小学生までですから、非常に手がかかるし、お金もかかるわけですね。家庭の安定という面から考えると、この年代で一人で家庭を支えていくのは大変な事だと思います。適当な再婚の相手がいるなら、再婚した方が良いと思いますね。

ただ、問題が起きてくるとすると子供の方でしょうね。子供が死んだ母あるいは、父への未練から反対するかも知れません。まだ、非常に幼くてあまり物事がわからない年齢なら良いのですが４、５才くらい以上になりますと、自分の親というものをしっかりと覚えていますから、新しい人が死んだ親の変わりであるという事に敏感に反応するわけですね。死んだ親に未練があるわけですね。これもある意味では仕方がありませんね。自分の親なんですから。

しかし、長い目で見て再婚した方が子供達にとっても良いと思われるなら、説得するしかありませんね。子供に対して、親が死んだという事をわからせる必要があります。この際に気をつけて欲しい事は、決して「あなたの親はもう死んでしまったのだから、もういないんだ。」という決めつけ方をしないで欲しいのです。子供の心は純粋ですから、こうした言葉は深いところまで刻み込まれてしまうんです。深層心理にこうした不幸が刻まれると、この子はなかなか幸福にはなり切れません。

ですから、できれば「あなたの親は、この世の仕事を終えて天国へ帰ったのだよ。でも、私たちはまだ生きなければならないから、新しい生活を始めよう。あなたの親も天国から私たちを応援していてくれるよ。」と優しく諭してあげて欲しいのです。子供心を傷つけないように。この際に、故人が天国で生きているという思想は非常に都合がいいわけですね。子供に恐怖心や無情感を与える危険性が少ないですね。

そしてね、このことは現在人々が思っているようなでたらめでは決してありません。現実にあの世はありますし、霊もいます。神様も当然います。ただ、完全に証明する事は無理です。なぜなら、次元の違う世界だからですね。同じ次元の世界なら、簡単に証明する

事ができますが、違った次元であるためにその存在を伺う事はできるが証明は難しい事となってしまうのです。物質の次元の世界ではないんですね。霊と言って、生命エネルギーだけの世界なんです。だから、生命エネルギーが物質と接触する事もできなければ、物質の方でエネルギーを掴む事も見る事もできないわけです。

だから、確認する事ができないんですが、でも、ないわけではありません。この世の物質の世界にはエネルギーが同居しているんです。重なりあって存在しているんですね。だから、マッチをすれば火が燃えて熱や光のエネルギーが出てくるんです。エネルギーというものが存在していなければ、物質からエネルギーが発生する事などあり得ません。私達の生命についても同じです。肉体という物質と霊という生命エネルギーが同居して存在しているわけです。これが死ぬと、肉体がなくなり霊という生命エネルギーだけの状態となるわけです。

このように、現在巷で考えられているような物質だけしかないという考え方は明らかに間違っていますし、非常に有害です。こんな唯物論から生まれてくる考え方は「生きている間に良い目をしなければ損だ。」というエゴイズムだけですね。こうしたエゴイズムが愛や情熱のある立派な人間を育てるわけはないのです。冷たい、暗い自分勝手な人間となってしまいます。

だから、こうした人生の転換点に際しては決して唯物的な考え方をしないようにお願いしたいのです。人生とはそんな無情なものでも意味の無いものでもありません。非常に大きな価値を秘めているものです。ただ、それに気づくかどうかは本人次第なのです。永遠の生命という観点からこの世の人生を考えるときに、初めて人間は死という束縛から解き

離れ自由な存在となるのです。こうした人生の黄金の瞬間を幼い内につみとるような行為は止めて欲しいのです。

また、再婚の相手についての悩みがあると思います。相手と子供達がうまくやって行けるだろうか。仲良く暮らせられるか、馴染んでくれるだろうか、新しい子供ができたら兄弟として分け隔てなく育てて行けるだろうか。と、こんな事が気になるのではないでしょうか。しかし、こうした事は気に病んでもどうなるものでもない事ですね。心配したからといって、良くなるわけではありません。実際にやってみて良くなるように努力するしかないんです。キーポイントは愛情ですね。あなたの愛情に負うところが多いんです。このままで他人であった人々を結びつけていくのは、あなたの愛情しかないのです。愛の力で道を切り開いていくしかありません。

次に、４０代の人の場合ですが、この年代が一番難しいですね。何故かと言えば、子供達がちょうど思春期にあるからですね。思春期の子というのは非常に情緒が不安定ですから、扱いが難しいです。ひとつ間違うと、非行とか家出にもなりかねません。「家の子に限って。」という人ほど危ないです。こうした子供を持つ人は結論を性急に急がない事ですね。じっくりと家族で話し合ってみんなが納得してからにする事です。子供の感情というものを長い目で見て待ってあげて欲しいのです。ですから、機が熟するのを気長に待つという気持ちでおおらかに考える必要があります。

それから、５０代以上の人たちの再婚というのは特異なケースだと思って下さい。もちろん、悪い事でも、好ましくない事でもありません。しかし、このくらいの年代の人はもう自分のために生きていたんではいけないんですね。他人様のために、世間に役に立つた

めに生きなければいけないのです。社会に対して還元をしていかなければならない年代であるわけですね。自分が今までの人生で身につけた事を後世の人々のために残していくという気持ちが必要なわけです。このようにして人々の知恵が集積されていって、文明というものは栄えていくものなのです。ですから、自分の５０年以上の人生経験で得た知恵を子孫のために伝えていって欲しいんですね。

そういう意味で、自分自身の個人的な幸福を求める時期は過ぎたと言いたいのです。後の余生は社会の人々に尽くす人生と割り切った上で再婚するのならそれでも構いません。夫婦で力を合わせてやれば、効果も倍増するでしょうから。しかし、自分一人の快楽を求めていてはいけないという事ですね。

以上、年代別に注意事項を語ってきましたが、要するに再婚できるような立場にある場合はした方が良いというのが基本的な考え方ですね。後は、年齢や環境によって状況を見ながら対応するという事です。

しかし、中には適当な相手が見つからないとか、どうしても子供の賛成が得られず断念せざるを得ない場合もあるでしょう。そうした人のために少し参考になる事を言っておきたいと思います。

まず、本人はこれからの人生を一人で生きていくくらいの気概が必要ですね。子供の世話になろうとか考えないで下さい。子供には、その子供達を育てていくという聖なる仕事があるのです。これの障害となっていては話になりません。これを助けていかなければならないのですよ。だから、再婚できない以上、もう自分は一人で生きていくんだという気持ちはしっかりと持つべきですね。

次に、子供にとっては片親という事になるわけですが、これはそんなに気にする必要はないでしょう。昔のようにそんな事でいじめられる事もあるでしょうが、それは本人次第です。そういういじめられる子は何も無くともいじめられるものです。ある程度子供が大きくなっていれば、生活の不自由という事はあるでしょうが、精神的に障害になる事は少ないと思います。

家庭生活の不自由という事については、家族が役割を分担してやっていくしかありませんね。もちろん、家政婦さんを雇えるほど裕福な家庭なら何も問題はないでしょう。裕福でない家庭でも、家族が力を合わせていけばそれほど不自由な生活でもなくなると思います。この際に気をつけて欲しい事は、一人の人だけに負担がかかり過ぎないようにすることですね。こうした過酷な負担は、決して良い結果を生みません。病気や過労で倒れていたのでは何もなりません。長い目で見て十分こなしていける体制を取る事です。結局ね、こうした場面で神様が期待しておられる事は何だと思いますか。それは、家族の団結なんです。家族がみんなで力を合わせてこうした苦難を乗り越えていく事を願っているのです。そのための舞台だと思っていただいても良いと思います。どうぞ家族が協力してこれを乗り越えて行って下さい。

第３節　不倫の悩み

１．夫の不倫の場合

さて、皆さんお待ちかねの不倫の問題ですね。現在、テレビのドラマでも大流行がこの不倫の問題ですね。

不倫という言葉は意味から言っても倫理が不足しているという事ですね。自分達の欲だけで、社会的な配慮に欠けているという事です。エリートサラリーマンが転落して行くのがこのパターンでもあります。ついつい魔が指すと言うか、大丈夫だろうという事で気安く手を出して、抜けられなくなってしまうんですね。多いのは、会社の上司とＯＬの不倫ですね。

上司の方は大人だから大丈夫だろうという事で、秘密のつき合いをするわけですね。ＯＬの方も、若い男達と違って経済的にも、抱擁力もあって、頼もしく感じるんです。それで、酒でも飲むとつい体を許してしまう仲となってしまうんです。こうなると、なかなか抜けられずにずるずると年月を重ねてしまう人が多いようです。

でもね、こうした事が本人達にとってどんなメリットがあるんでしょうか。現在のように女を囲っている事が勲章のように思っている風潮は決して正しいものではありません。もっとやらなければならない事があるのではないでしょうか。たとえば、妻や家族を十分に幸せにしているでしょうか。あるいは、会社の仕事は十分に配慮の行き届いたものとなっているでしょうか。こうした事をなおざりにしての不倫など堕落以外の何物でもありません。

この責任はね、必ず取らされるんですよ。うまくやれば、お金で解決すると思っているかも、あるいはお金すら出さずに収まると思っているかも知れませんが、それはとんでもない勘違いです。たとえ、この世で首尾良く済ませたとしても、私達は死んだら消滅する

ようなそんな意味の無い生命ではないのです。死んでなお、生き通しの永遠の生命体なのですね。あの世と言われている世界で霊として生きているんですね。このことを知らなければなりません。

どういう事かと言うと、こうした人生における責任はこの世の内にかあの世でかはわかりませんが、必ず取らされるんです。因果応報の法則というんですが、原因に応じた結果が必ず自分に帰ってくるように創られているんです。良い原因は良い結果を、悪い原因は悪い結果を、自分が受けるんです。だから、不倫という原因が自分に帰ってくると覚悟しての行為だったら何も言いませんが、「うまくいくさ」というような安易な考えでの行為なら、大変な事になりますよ。

霊界には地獄という世界もある事は皆さん聞いたこともあるでしょう。まったくね、正直に生きている人はいいですが、そうでない人にとって永遠の生命ほど苦しいものはないんですよ。何故なら、彼らは地獄に落ちて何百年も苦しまねばならないからです。「こんな事ならいっそ命を奪ってくれたら良かったのに。」と地獄に落ちて、言っている人は数知れません。永遠とも思えるような責め苦が待っているわけですね。だからね、生きている間に責任を取るべきです。自分の蒔いた種は自分で刈り取るしかないんです。

不倫に限った事ではありませんが、生きている間に反省して責任を取る以外に道はないんですね。自らの弱さを謙虚に反省して、取れる責任を最大限にとるべきですね。ただね、この場合は一方的に男の方が悪いとは言えません。相手の方が誘惑するという事もあり得ますから、自分の非に応じた責任を取るべきですね。そして、妻や家族にも心の底から詫びる事ですね。これしかないです。離婚されたって、自分の責任ですから仕方ありません

ね。とにかく、清算するしかないですよ。こうした関係は長引けば長引くほど、その結果は悲惨なものとなるんです。早めに、傷の小さい間に清算する事ですね。そして、次からはもっと賢くなる事です。今回の経験を機会に正しい生き方をされる事ですね。

今までは、本人についての話でしたが、次に妻の立場での夫の浮気や不倫について参考となる事をお話したいと思います。

まず、夫が他の女性と不倫や浮気をするという事は１００％夫が悪いように考えがちですが、原因の４０％位は妻にある場合も多いのです。なぜなら、妻というのは家庭を預かる人ですね。家庭には、夫と子供がいますね。だから、妻は夫や子供達を道から逸れないように誘導していく仕事があるんです。単に家事だけなら家政婦さんでもしますね。妻が家政婦と違う以上は、妻としての努めを果たさなければならないのです。その最大の仕事が実は、この夫や子供達を素晴らしい人として社会へ送り出すという仕事なんです。

社会の中にそれぞれの家庭というまた違った小さな社会があるのは、家庭という単位での教育が必要という事なんです。社会に貢献できるような人物というのは、そんなに簡単にはできないんですね。家庭の中で、じっくりと育てられてできてくるものなんです。この人物の創造という事の多くを妻が持っているわけです。

それは、内助の効という様な形で現れたり、心の支えという様な形であったり、仕事の張り合いという様な形であったり、様々ですが、妻という立場の人が誘導している場合がほとんどなのです。世の中で立派な仕事をしている人は、ほとんどがその家庭に秘密があるんですね。家庭がしっかりしていたり、調和していたり、落ちついた環境がある場合が多いんです。また、そうであるからこそ、全力で仕事に打ち込めるわけですね。だから、

立派な仕事ができるんです。仕事場に行っても、家庭の事を心配しているようではろくな仕事はできませんね。

そうすると、夫や子供の社会的な出来は実は、妻の影響によるところが大きいわけです。優れた妻のいる家庭はやはり素晴らしい家庭となる可能性が高いですね。家庭の中心的存在なんです。そしてね、人間というのは家庭無しでは満足に生きて行けないんです。会社はね、変わりはいくらでもあります。学校だってそうですね。しかし、家庭というものは変わりなど無いですね。たった一つの貴重なものなんです。これをね、現在は余りにも軽視し過ぎているんですね。本当はしっかりとした家庭がまずあって、それから秩序ある社会ができてくるんです。家庭がすべての基礎なんですよ。そこの中心人物です、妻というのは。

ですから、夫が不倫や浮気をするようなだらしない夫にした責任は妻にもあるわけですね。普段から、十分に尽くしてあげていたでしょうか。普段、余りにも相手にされていない反動からの行為であったかも知れません。妻たるもの、夫一人まともに仕事させないで何のための妻ですか。あるいは、子供達を非行に走らす様な家庭はいったいどんな教育をしているのですか。妻がね、普段から気を使って、よりよい方向へと導いているような家庭はそんな事もあるはずがないんです。

たとえば、浮気する直前にね、妻の顔が浮かぶんですね。そのときに、普段相手にされないような妻では引き留める力はないですが、夫にとって素晴らしい妻ならね、妻の事を思うとできないんですね。本心は誰でもしたいんですよ。でも、欲望を抑える心ですね。理性と言うんですが、これが強く働くか、麻痺しているかで結果は大違いなんです。普段

から阻害されているような夫は、不満が溜まってしまって理性が麻痺しているんです。しかし、良い妻を持っていると、逆にそうした場合に妻の顔が浮かんできて抑止力が働くんですね。こんな違いがあります。

ですから、妻として夫や子供達を良い方へ導いて行けないでは何の為の妻かわからないですね。家事やパートなど二の次で良いのです。一番の仕事、夫や子供を立派に創造するという仕事を忘れないで欲しいのです。これが十分にできていれば、不倫や浮気などというような事は普通は起きようがないんです。

2．妻の不倫の場合

次に妻が不倫する場合ですね。この場合について言える事は、女性の堕落ですね。

元々、女性というのは家庭を守るように創られているんですね。それが家庭を捨てて不倫に走るというのは問題外と言わざるを得ないですね。妻としての自覚もないし、欲望に翻弄されているんでしょうが、困った話です。このような事態が増えている原因に、女性の社会進出が上げられるでしょう。いままで家庭に閉じ込もっていた女性が、社会に出て働くようになり、社会的地位という面では向上したかも知れませんが、エゴの風潮に染まってしまう人も多く良い目をしなくては損だと色々な事に手を出す女性も少なくありません。

この不倫の問題もテレビなどで余りにも取り上げられ過ぎており、それがかえって不倫をあおっているような気がします。不倫が格好良い事のように思っている人さえいるようですね。また、少女の性体験ですね。処女を守る事が遅れている事のようにとらえられている風潮さえあります。それもこれも社会がおかしくなってきている影響を受けているんですね。女性というのは感性的ですから、社会の風潮の変化というものには非常に敏感なんですね。現代のように本当の正しさというものが見失われている時代には、道から逸れて地獄へと赴いていく女性も後を絶ちません。

結局ね、何故生きているのかわかっていないんです。偶然に両親から生まれてきて、自然と育って行き、最後は死んで消滅する命だと思っているんですね。だから、短い命だから快楽の方に行ってしまうわけです。死ぬまでに少しでも良い目がしたいわけですね。この気持ちがどうも根本にあると思います。ですから、性の誘惑にも非常に弱いですね。むしろ自分で望んでいる人さえいます。

こんな間違った倫理感では浮気や不倫や非行など無くなるはずがないんです。やはりね神理を知る必要があるでしょうね。もっと神様の心というものを知り、人生の目的や使命というものを知る必要があると思います。私達が皆、その本質は永遠の生命を持つエネルギー体だという事を知って欲しいですね。そして、自らの精神の向上を目指してこの世の盲目の世界で人生という体験をしているのだという事を知って欲しいのです。

このような一見悪と見えるようなものが現れているのは、人間の方の間違った生き方による反作用であるという事です。人々の間違った生き方が反作用となって悪い結果をもたらしているに過ぎないのです。元々、神様がそんな悪を創ったわけでも、許しているわけでもないのです。人間に完全な自由を与えられたために、その自由の発現の結果としてこのような反作用が現れているのですね。根本が間違っているからです。神など無い、霊な

ど無い、あの世などあるものかと、この世の快楽だけを求めている人達で満ち満ちているからです。

ですから、女性が不倫や浮気に走っているような社会はもう末期症状が出ているとしか言いようがないのです。単なる個人の悩みの問題ではありません。社会に流行っている伝染病に冒されているんですね。唯物論やエゴイズムという名の伝染病です。そうですよね、完全にエゴイズムではないでしょうか。家庭をまかされている立場にありながら、夫や子供や家庭をなおざりにして快楽に走るというのはエゴ以外の何物でもありません。

ですから、この問題については個人的なアドバイスとしては、「常識と言われているものほど危ないものはない。間違った時代には人々と同じ事をしていては、待っているものは地獄の苦しみだけだ。そうした間違った人々の中で正しさというものを求めなさい。」と言う事だけですね。本当にね、目覚めて欲しいんです。回りの人達と一緒に平気で赤信号で横断歩道を渡っていてはいけないんですよ。交通事故に会うからです。自分が傷つくんです。自分は自分で守らなければいけない。神の心という青信号を見なければいけない。そしてそれに従って、正しく安全に渡るべきですね。横断歩道という名の人生ですね。渡ったところが天国なんですね。

まあ、すでに不倫をしてしまったと言う人もいるでしょうから、地獄へ落ちるぞとばかりも言っていられないので、こういう場合のアドバイスもしておきます。

まず、妻は反省する事が一番ですね。夫が普段から尽くしてくれないからだとか、環境が悪いからだとか他人のせいにしないで下さい。たとえ、どんな環境であっても自分で承知の上でその環境を選んで生まれてきているんです。言い訳にはなりません。謙虚に自分

の非を認めて下さい。そして、それを悲観するのではなく、良く分析して自分の傾向性として悪いところを見つけて下さい。異性に目を奪われ易いとか、自制心が弱いとか、その時の気分で行動してしまうとか、欠点と思われるところを拾い出して下さい。

そして、次にその欠点が自分のどんな性格から来ているかを考えて欲しいんです。人に頼る性格とか、感情の起伏が激しい性格とか、判断力が鈍い性格とか、自分の性格の悪いところを見つけて下さい。そして最後に、その悪い性格を変えようと誓って下さい。努力によって。後は、毎日毎日がその誓いの実践です。実践あるのみ、向上あるのみです。

そして、犯してしまった過ちは可能な限り誠意を持って清算する事ですね。離婚とか、慰謝料とか色々と面倒も多いでしょうが、自分の責任ですから仕方がありません。これも誓いの実践だと思って頑張って下さい。たとえ、今回の人生が形の上では惨めな結果に終わったとしても、今回の人生で悟った事は永遠にあなたの財産となるのです。ところが、この世で手に入れた物はことごとく置いていかなければならないものばかりです。お金や家や夫や子供でさえ例外ではありません。ですからね、貴重な経験をしたと思って、今度の人生からは道をはずさないようにする事ですね。そうであってこそ、今回の人生の意味があるんですね。人間が死んであの世に帰り、またこの世へ生まれ変わってくると言う事は間違いの無い事実です。

第２章　金銭的な悩みの解決のために

第１節　借金の悩み

借金と一言に言っても、その内容は色々です。たとえば、ローンであったり、クレジットや融資などであり、その目的も住宅や車の購入、各種の買い物、事業の資金など様々です。

こうした借金自体を悪い事だとは言いません。しかし、問題が起きるのはこの借金の返済が難しくなったときでしょう。借りるときは大丈夫だろうと思って借りるわけですが、見通しが甘くて返済が非常に苦しかったり、返済を先延ばしにしている間にいつの間にか利子が膨らんで大変な金額になってしまったり、あるいは景気や環境が変化して事業がうまくいかなくなったりすると大変な苦痛となりますね。

要するに、予定どうり返済できれば何も問題とはならないのですが、何かの原因で予定が狂ってくると苦しい状態に追い込まれる事となります。これはある意味では仕方がありませんね。人間は神様ではありませんから、未来の事を正確に把握できませんし、また人生というのは元々変化に富んでいるものなのです。だから、短期の借金は別ですが、長期になると予定とはだいぶ狂ってくる事も考えておかなければなりません。

このときにね、方法は主として二通りあるでしょう。ひとつは借金の金額を控えめにするという事ですね。小さくする事です。もう一つは万一に備えて何か手を打っておくという事でしょう。

最初の金額を控えめにするのは常識ですね。でも、特に少額のクレジットなどで頻繁に借りる人はこの方法が一番効果があると思いますね。必要以上の物を買わない、また衝動買いをしない、毎月一定の限度までとする、などのルールを自分で作ってこれを守っていく事です。こうした短期型の融資は比較的金利が高いので、馬鹿にして返済を滞っていると数年もすると信じられないような借金の金額となります。サラ金などは特にそうですね。ですから、最小限度にとどめる事、そして毎月きちっと返済していく事ですね。この二点に尽きます。

次に、万一に備えておく方法ですが、これは特に長期型の借金をする場合ですね。２０年、３０年という長期になりますと、当然景気の変動もあるでしょうし、家族の中にも色々な事件が起きます。ですから、こうした事柄によって予定が狂ってしまって返済能力が無くなるという事も十分考えられますね。それで、こうした最悪の事態が起きても何とか生活を守れる工夫をしておくという事です。

具体的な方法としては、保険を掛けておくというのも一つの手でしょうね。そして、住宅ローンなどは契約のときにこれが義務になっている場合も多いようです。主人にもしもの事があっても保険金でローンは返せるという発想ですね。これも結構ですが、ただ問題となるのはこの保険自体にまたお金がかかるという事ですね。何もなければ、借金の金額が増えるのと同じ事ですね。ただ、保険の種類にも寄りますが、保険自体に貯蓄性のある物もあって、こうした部分で毎月の掛け金が大きくなっている保険もありますから、もっと掛け金の少ない物に変えるとか、保証を最小限にするとか、あるいは毎年掛け捨ての保

険にするとか色々と工夫してみて保険の部分にかかる金額を圧縮する必要があります。元々借金だけでも苦しいはずですから、保険の掛け金を小さくするのは当然の事ですね。

ですから、この場合はあまり欲を出さないことですね。万一の事を考えると少しでも大きな保証が欲しいでしょうが、そうなると逆に毎月の返済額も大きくなって苦しくなりますから、万一の場合に借金を返済できれば善しとしなければなりません。ですから、借金の総額と保険の保証額を同じくらいにする事ですね。これが一番無駄がありません。でも、それではその後の生活費はどうするのかという人もいるでしょうが、こうしたものにまで十分な保証をするだけの余裕がないのだから仕方がありません。毎月の返済ができなければ何もならないのですよ。後で解約するような保険では何の足しにもなりません。その後の生活の事が気にかかるのならね、余ったお金を全部使ってしまわないで貯蓄に回す事ですね。少しずつでも貯めておく事です。そしてね、何年か経って余裕が出てきたら、もっと大きな保証のものに乗り換えてもいいんですから。

それと、もう一つ別の方法として借金の担保として、失っても生活には困らないものを用意しておく方法です。たとえば、土地であるとか、有価証券であるとか、金などの貴金属であるとか、万一のときの担保を用意できる人は安心ですね。普通の人達はなかなかそんなものを持っていないでしょうが、田舎のお父さんの土地が遺産として入るとかいう場合もないとは限りません。こうした担保を処分してしまわないで確保しておくという方法もありますね。

あと他には、将来大きな価値を持つようなものを少しずつせっせと買い込んでいくという方法もありますね。たとえば、金であるとか、証券であるとか、土地であるとかですね。

ただ、証券などは物に寄っては倒産などによって紙切れになる物もあり得ますから注意が必要でしょう。また、土地などもなかなか少しずつ買う事も難しいかもしれません。まあ、こうした方法は貯蓄と同じ事ですね。余裕のあるお金を最大限に活用しようとしているだけです。毎月の余ったお金を使ってしまわないで、前述のような価値のしっかりとした物に替えていこうとしているわけですね。この方が貯金よりは張り合いがあると思う人はやってみて欲しいと思います。要するに、余った分をムダ遣いにならないようにするわけです。そして、少しでも多く増える方法を探しているわけですね。

このような事をあらかじめ考えておいて欲しいと思うのです。そうすれば、最悪の事態になる可能性は少ないと思います。

最後に、もう既に借金が返済できないような状況に、あるいは返済が非常に困難な状況にある人について参考になる話をしたいと思います。

この場合はね、手段は二つしかありません。つまり、借金の対象となった物、たとえば住宅などをあきらめて売るか、あるいは毎月もっとお金を稼げる方法を探すかのどちらかですね。

まず、前者について言えば、特に住宅などで無理をして高いのを買ってローンに苦しむ場合も多いと思います。何十年に一度の事ですから良いのが欲しい気持ちはわかるのですが、ローンを払えなくては仕方がありません。もう少し安い物に替えるのも一つの方法です。一度手放して、郊外で安いのを探すとか、下取りをしてもらってマンションにするとか、色々な方法があるでしょう。要は、無理だとわかれば未練を絶ってきっぱりとあきらめて新しいのに乗り換える事ですね。どうせこの世の物はすべて無常なのです。今、自分

が良いと思っている物でも時代が変われば、古くなりますし、つまらないと思っていた物が脚光を浴びる事だってあります。分相応の生活で満足するようにならなくてはなりません。一生懸命働いてお金を貯めてもっと良いのを買えば良いのです。

次に、二番目の方法でもっとお金の入る仕事を見つけるという事です。でも、これはなかなか難しいですよ。誰でもというわけにはいきません。しかし、現在不足している分のお金くらいなら何とか工夫で増やせられる場合もあります。たとえば、主人だけが働いている場合は奥さんもパートなどをして収入を得るというのも一般的な方法ですし、両方働いてもなおかつ足りないという場合は、特に奥さんの方の収入をもっと増やす方法を考えてみる事ですね。たとえば、ワープロを覚えて印刷会社で働くとか、技能や資格を取ってみるのも一つの方法でしょう。

でも、どうしてもダメなときはあきらめて前者の方法を取る事ですね。無理を続けていると倒れてしまったり、入院したりでろくな事になりません。ダメだと思ったらいさぎよくあきらめて新しく出直せば良いんです。

中には、もう売る物もないし、借金の額も桁違いに増えていてどうしようもない場合もあるかもしれません。こんな場合には処分できる物は処分して民生機関などに相談する事ですね。破産申告などをして裸になる事です。そしてまた、一から出直しです。でも、今度は前回の失敗を教訓として賢くなって下さいね。ある程度の犠牲はあるでしょうが、やり直す方法はあるはずです。決して自殺など考えてはいけません。自殺などしても何も解決しないんです。死ねば終わりだと思っていたら大間違いですよ。このような借金の取り立てに苦しんで自殺した人はね、そのような地獄にいくんです。絶えず、命を狙われている

ようなところですよ。そして、逃げてばかりいるわけです。ときには捕まって殺されるわけですが、霊界での出来事ですから、また少ししたら生き返るわけですね。そして、また逃げるんです。これを何十年、何百年も繰り返すわけです。全然割が合いませんね。

ですから、どんな事があろうとも自殺という行為によって苦しみからの逃避を考えることだけは止めてください。そんな事をしても逆にもっと苦しい世界が待っているだけなんですね。霊界という世界は想いの世界なんです。借金苦から逃れたいという想いからの死は、そのままの想いの世界へと通じるわけです。つまり、借金の取り立てという事が本人の頭の中には強烈にあるわけですから、そういう関心事の世界へと赴くのです。つまり、追われ続ける世界ですね。逃げたい逃げたいという想いが殺人鬼や鬼から追われ続ける世界へ導くわけですね。ですから、こうした事はこの世に生きている間に解決しておかなければ大変な事になります。

どうせ、この世は一時の夢のような世界なんです。死んだって命は決して無くなりませんから、開き直って問題解決に当たる事です。死ぬ気になればね、何だってできますよ。プライドもこだわりも捨てて、裸で出直す事です。全力でぶつかる事ですね。その時に新しい道が開ける事もあります。最後まで負けてしまわない事ですね。そうすれば、たとえ形の上では余り変わらなくても死んでからは大違いです。前述のような地獄には行かなくてもすみます。

第2節　貧乏の悩み

現代の日本においては、貧乏な人というのも数少なくなったと思うのですが、中にはやはり貧乏と言えるような生活をしている人もあるでしょうから、参考となるような事をお話したいと思います。

まず、現代のような比較的仕事にも恵まれ、また能力次第では道も用意されている時代に貧乏と呼ばれるような生活を余儀なくされているという方は、何か他の人達と違って特に不幸を呼び込む欠点があるはずです。たとえば、怠け者であまり働くのが好きでなく働きに行ってもすぐに辞めてしまう人や、生まれ育った環境が悪くてほとんど教養も身につけていなくて世間から離れて暮らしているような人とか特殊な人々に該当すると思います。後者の人々にはいわゆる同和地区と呼ばれている地域も含まれていると思います。

こうした人々に言いたい事は、貧乏を掴むなと言う事ですね。つまり、現代のような仕事もその気になれば捜せる時代に何故、貧乏を続けているのかそれを反省して欲しいのです。そう言うと、「それは環境が悪くて教育が十分に受けられなかったせいだ。」とか、「体が弱くて働いても長続きしないためだ。」とか色々と言い訳をするでしょう。

しかし、そのような環境の中でも工夫次第で収入を得る仕事はあるはずです。そして、仕事にしても見栄を捨てればいくらでもできる仕事はあるはずですよ。一般の人々が嫌うような仕事ならいつでもあるんではないでしょうか。それを嫌がる仕事につくのは嫌だとか割の悪いのは嫌だとか、自分で拒否しているのではないでしょうか。中流の人ならいいですよ、それでも。でも、貧乏と言われるような状態の人ならね、その状態から脱却する事を最初に考えるべきです。あの松下幸之助さんはね、丁稚奉公から始めたんですね。それから、忍耐と努力と工夫で超一流企業を作ったんです。彼も非常に体が弱くて、満足に

働く事が難しかったんですが、分業性という物を発案して逆に会社を発展させました。

ここまでは求めませんが、現在の状況から脱する道などいつでも用意されているんです。それに気づこうとしないだけですね。「職業に貴賤無し。」貴い職業とか、卑しい職業とかは無いんです。あるのは、世間の人々の偏見だけです。本当に貴賤を決めるのは、職業そのものではなくて、その仕事をする人々の心のあり方なんですね。たとえば、政治家は良く立派な仕事だと言われていましたが、現在においては逆にマスコミからの非難の的になっていてそれほど立派な人達とも思えなくなっています。これは、現在の政治家が考え違いをしているからです。政治家というものはね、国民の幸せを願って、そのために色々な政策を行う人達なのです。本来は、国民の幸福のために自分の利害を捨てて奉仕する人なのです。そういう人達であるからこそ、貴いのです。それが現在のように、事もあろうに自分の政治資金を稼ぐために税金をごまかしたり、業者から賄賂を受け取ったり、国民の幸福よりも自分の利害が優先しているような人達を貴いと思うものですか。私は、こんな人達を政治家とは呼びたくない。

また、逆に卑下されている仕事というものも結構ありますね。たとえば、清掃社の仕事などもそうかも知れません。確かに仕事自体は汚いものを扱う仕事ではあります。体が汚れたり、臭くなったりするので嫌がられるわけですね。しかし、収入的にはかなり良いはずです。また、もしこうした仕事をしてくれる人がいなかったらどうでしょう。大変な事になってしまいますね。とたんに、家がゴミや汚物の山になってしまいます。ですから、こうした人々のおかげで私達の生活は成り立っているんです。だから逆に感謝しなければならないのです。彼らが嫌がられるような仕事をしてくれているおかげですね。だから、

これは見る方の人達が間違っているんですね。

このように考えてみると、自分が職業に対して抱いている考え方は正しいものとは限らないわけです。自分の偏見によって選択の幅を縮めて、仕事がないと言っている人も多いと思うのです。世間の人達の声よりも、問題とすべきは自分の心構えなのです。たとえ、どんなに単純な仕事でも、それを自分のためだけではなく、人々への奉仕のつもりでやるときにそれは貴い仕事となるんです。わかりますか。要は、どれだけ自分の欲を捨てて回りに奉仕できるかなんです。これが貴賤を分けるんです。ですから、卑しい政治家も貴い掃除婦もあり得ます。

心です。心を腐らせたらどんな仕事だって卑しいし、輝いた心でやる仕事は貴いんですね。だから、回りがどう言おうと自分の心さえ間違っていなければ、どんどん収入の上がる仕事をやって行くべきです。でも、決して自分を卑下してはいけない。無私に奉仕を続けていくときに貧乏などという状態にいつまでもとどまる事など無いのです。そこには、発展の道が開けてくるはずです。中流さえも飛び越し、裕福な生活もあり得ます。

ところが、たいていの人は自分であきらめているんですね。「どうせ私は何をしてもダメさ。」と、やる前から拒否しているわけです。だから、私は貧乏を掴むなと言っているんです。自分自身で貧乏を手放そうとしないんです。まず、貧乏を掴むのを止めて欲しいのです。何故、あなたが貧乏でなければならないのですか。どこにそんな法律や決まりがあるのですか。どこにもないです。あなたがお金持ちになっても誰も困りません。ならば、お金持ちになれば良いではないですか。

しかし、このお金持ちと言うのはまず、自分の心の中に造るものなのです。お金持ちに

なれるような心を造るという事です。それには、欲は邪魔になるんです。奪おう、奪おうとする心は逆に奪われるんです。捧げよう、捧げようとする心は逆に与えられるものなのです。だから、捧げられる心になる事です。これが、実は金銀財宝よりも貴重な宝なんです。「富者の万灯より貧者の一灯」という言葉があります。神様はね、お金持ちがろうそくを一万本寄付してくれるより、貧乏な人がその苦しい生活の中から一本のろうそくを捧げてくれる方をありがたがるという事です。神様が欲しいのはろうそくじゃないんです。捧げてくれる気持ちなんですね。

インドの釈迦がかつて山に篭もって修行をしていた頃に、食事を得るために托鉢をして回っていたわけですが、ある家に行ったところ「私の家はたいへん貧乏で何もお分けするものがなく申し訳がないので、ここの灰で心を込めてお団子を造るからどうぞ召し上がって下さい」と言われて、そのお団子を造ってくれる気持ちをありがたく受けられたという話も残っています。こうした富める心をまず造って下さい。自分のものとしようとせずに、捧げようとする心ですね。この富める心を持って仕事に奉仕していくときに、道は開けて行かざるを得ないんです。発展という輝ける日々が訪れるでしょう。

お金とか地位とか言うものはね、この富める心を表現する手段に他ならないんです。本来はこの度合いを現している尺度なんですね。ただ、現在のように世間の価値尺度が間違っている時代においては完全に評価されるとは思えませんが、貧乏と言うような状態から脱する事は間違いないと思いますね。こうしたお金や地位などのものは自分で得るものではなく、与えられるものなんです。自分の仕事への奉仕の見返りとして与えられるものなんですね。だから、本来は捧げる気持ちが大きい人ほど多く与えられるべきなんです。

第3節　中流から脱却したいという悩み

さて、次はいわゆる中流の人がもっとお金持ちになりたい、成功したいという悩みですね。この中流という言葉がいったいどの程度を現しているのかは疑問ですが、普通の人達はほとんどこの中流に入るのだと思います。すると、平凡な人が非凡になりたいと思う悩みであるという事になります。

これについて言えば、功罪の両面があります。つまり、こうした非凡になりたいと思う気持ちが向上心の動機になっている場合は良いパターンですね。でも、逆に平凡な生活が不平や不満の原因になり、悩みを作っている場合はマイナスの場合ですね。前者の場合には特に悩みでもないと思いますので、問題になるのは後者の場合がほとんどですね。ですから、ここでは主として、中流から脱却したいがいっこうに出世もしないし、給料も増えないし、平凡な毎日ばかりで不平や不満でいっぱいで面白くないという場合について考えてみましょう。

ここでまず、知って欲しいことは「足る事を知る」という事です。人間には誰でも欲というものがあります。これが、先ほど言ったように向上心や努力の動機になっている場合は良いのですが、不平や不満が募ってくる場合はね、考え方を変える必要があります。それが、「現在ただ今の状態で満足する」という事なんですね。つまり、不平や不満が出るという事は今の状態で満足できないからですね。特に、給料とか、地位とか、車や家などの物質的な物については、この現在の状態で満足するという事が大切なんです。

なぜなら、こうした物質はその総量が限られているんですね。だから、すべての人々が満足する量は絶対に無いんです。すると、これを際限無く欲しがっていますと、当然争いが起きるわけですね。物の奪い合いですね。こうした争いが私達を幸福にする事などありません。闘争と不安の中に落ち込むだけですね。そして、こうしたお金や家や車などで象徴される富は、いつか朽ちていくものですね。永遠不滅の物ではありません。また、私達人間もいつかは死んであの世に帰らなくてはならない存在です。その時にこうした富を持って帰れるかと言えば、帰れません。この世に残して行かなければならないのです。

そうすると、こうした物質は本質的にあまり大した意味を持っていないという事になります。変化する物であり、いつかは自分の手から離れていく物なんですね。一時のアクセサリーのような物ですね。ところが、私達の命の方は、現在盲信されているような肉体とともに消えていく命ではないのです。肉体は朽ち果てても、私達の本質である生命エネルギーは不変です。永遠の生命を持っているんです。このことを知らねばなりません。

すると、この世の意味がおぼろげながら見えてくるのですね。何故、この世はこんな物質で溢れ、私達は肉体という衣をまとって有限な人生を生きているのかという事ですね。これは、目隠しされて、自らの想いや行為を試す機会を与えられているんです。つまり、こうした世界の中でどれだけ神様の望まれる生き方をする事ができるかを試されているんですね。これがこの世の人生の意味なんです。そして、この試験が付随的に進化というものをもたらすわけですね。つまり、努力や勤勉な態度を現す場合は進歩するわけです。ところが逆に、物質欲に走り、闘争と略奪に生きると堕落ですね。神様に顔を会わせられなくなってしまいます。ですから、暗い地獄と言うところへ赴くわけです。

だから、この人生の意味というものを十分に知った上で行動して欲しいのです。そんな欲望に翻弄された人生の責任は誰が取るのですか。自分しかないのです。自分が地獄で数百年間、苦しみ悶えるしかないんですよ。だからまず、この物質への欲望を去る事です。執着とも言いますが、こうした想いは自らを堕落へと導いてしまうんですね。でも、そうしたら何故こんな悪の存在が許されているのかと言うと、それはこうしたものが逆に進化への踏み台になり得るからです。こうした物質欲を去り、自らの進化や人々への調和に生きる事が理想なわけですが、逆の状態のものを持ってこないとこうした事の価値がなかなかわからないのです。争いや堕落や惨めな出来事など、一見悪と見える事を経験する、あるいは見るという事から逆に平和や調和、人々の幸福という事がどれだけ素晴らしいものであるかが実感できるわけですね。

そして、たとえば現在のような間違った社会を理想的なユートピア社会にする事ができれば、私達人間は精神的に大いなる進化をするわけですね。その根本は、いつもこうした一見悪と見える存在の意味を知る事なんです。身分や収入の違いや争いや戦争などこうした悪は私達の考え違いが起こしているに過ぎないわけですね。私達が、唯物的になってしまって永遠の生命を信じず、神を信じず、自分の欲望のために生きているからに他ならないのです。執着を去る事です。執着を去ったときに、やすらぎが生まれ、調和が生まれ、幸福が生まれてくるんです。

この中流から脱却したいという悩みこそ、執着であると私には見えるのです。何故、自分だけが他人より出世していなくてはならないのですか。何故、自分だけが他人よりお金持ちでなくてはならないのですか。どこにそんな根拠がありますか。これは、自分の欲望

以外の何物でもないのです。お金や地位などがある事を悪いとは言いません。こうした物があれば、それはそれで素晴らしい事だと思います。しかし、こうした物がない事を嘆くのは間違っています。不平や不満で生きるのは間違っているんです。

自分より貧乏な人など世界中にいくらでもいるんです。そうした人々よりも、自分が恵まれている事を逆に感謝するべきなのです。上を見ても下を見ても切りがないのがこの世界なのです。こうした相対の世界の中で、絶対的なもの、永遠のものを追求して欲しいのです。自らの進化や人々との調和です。こうした事に努力していくときに幸福はやってくるのです。

第３章　肉体的な悩みの解決のために

第１節　自分の病気の悩み

病気というものも、人生においては何度か経験するのが普通でしょう。そして、この病気の事で悩む時もあると思います。病気とは、心身が不調になる事ですが、まずこの原因について考えてみましょう。

病気の原因は、大きく分けて二つに分けられます。一つが、精神的な原因であり、もう一つが肉体的な原因です。そして、この両者の比率はと言うと、現代の西洋医学の常識とは違って、ほとんどが精神的な原因によるものなのです。それぞれについて説明しましょう。

まず、精神的な原因による病気についてですが、これの内容を大別すると、第１に霊的な憑依現象によるもの、そして第２に自分の心の中の葛藤が原因となっているもの、第３にはそうした病気が現れてくる事が予定されている場合があります。

第１の霊的な憑依現象の場合については、いわゆる悪霊と呼ばれる地獄で苦しんでいる霊達や動物霊ですね。彼らが苦しさのあまり、地上に生きている人々に憑依する場合があるんです。憑依された人は、自分の肉体の中に他の悪霊が入るものですから、その肉体は両方の霊の影響を受けるようになります。そして、こうした地獄霊というのは例外なく苦しみの中にいるわけですね。そうすると、その苦しみやその霊の持っている性質が肉体の

方へも投影されてくるのです。

つまり、心臓病で亡くなってその苦しみから逃れる事ができずに地獄で苦しんでいるような霊が憑依してくると、急に心臓が痛んでくるんです。病院へ行けば間違いなく心臓病と判定されるでしょう。また、人間霊だけではなく、動物霊による場合もあります。彼ら動物も現在のように人間に直接殺されたり、あるいは環境を破壊される事によって間接的に殺されていますと、人間達に対して恨みの念を持っているわけですね。たとえば、蛇や狐などは非常に多いのです。なぜなら、彼らの心の性質として、非常にしつこく、復讐し易いのですね。さっぱりとしていないので、ちょっとひどい目に会うとすぐに復讐してやると思うのです。

こうした動物霊の憑依による病気も相当あるんですよ。たとえば、皮膚病ですね。皮膚がヌルヌルとしてただれるような皮膚病はほとんどハ虫類の霊の憑依ですね。彼らの皮膚はヌルヌルですね。この性質の影響が出てきているんです。また、リウマチという病気も蛇などが巻き付いて来てからだが自由に動かなくなる病気です。風邪という病気でさえ、虫の霊の憑依なんですよ、彼らがインフルエンザなどのビールスとともに憑依してくるわけですね。ですから、急に寒気がしたり、熱が出たり、鼻水が出たりするんです。そして、次から次へと移っていきますね、これは次の人へと憑依して行っているからです。だから伝染するわけです。ビールスだけなら、そんな物、大気中に無数にいます。しかし、これに感染する人としない人がいるのは、憑依を受ける人と受けない人がいるからなんですね。

しかし、もっとも恐ろしいのは、精神分裂と呼ばれるような精神病ですね。これは、悪霊による完全憑依現象なんです。つまり、自分の中に数人の悪霊が入れ替わり立ち代わり

入ってくるわけです。そして、それぞれ勝手な事をしゃべったり、行ったりするわけですね。こうした悪霊は何百年も前に死んだ霊ですから、時代遅れの習慣や風習などをやりますし、地獄で苦しみ悶えていますので、そのために自制心などまるっきり無くなっております。欲望の虜になってしまうのですね。こうした霊が数人、常時その人を操るようになると、本人の意識はまったく隅に追いやられてしまうんですね。そして、自分で自分がわからなくなってしまいます。自分がしゃべっているのか、悪霊がしゃべっているのか、自分で行動しているのか、悪霊に操られているのかわからないんです。こうなると、非常に危険ですから、隔離する必要があるわけですね。精神病院行きです。

第2に、自分の心の中の葛藤が原因となっている場合ですが、良く知られている例ではストレスというのがありますね。ストレスが原因で神経性胃炎になったり、胃潰瘍になったり、ノイローゼになったり、狭心症になったりする事は誰でもご存知の事と思います。私達の心というのは、非常に大きな力を持っていて自分の肉体に病気を造る事すらできるんです。癌という病気もこれなんですね。自己処罰などの念が体の中に癌細胞を生み出すんです。

ですから、私達は常に明るい、さっぱりとした心を持つようにしなければならないのです。暗い心で悩みを抱いてばかりいると、その原因の結果として病気という反作用が現れてくるわけです。

第3には、人生のある時点で病気が予定されている場合もあるんです。たとえば、ヘレン・ケラーですね。彼女は、三重苦と言って目も耳も口も不自由になりましたが、こうした事は実は予定どうりの事であったのです。彼女は高級霊界から出た光の天使であるので

すが、このときの使命が、全国の、そして後世の身体障害者に希望を与えるという使命を持って生まれてきたんですね。現在、アメリカで活躍しているホーキング博士も同様の使命であると思います。

こうした人達は、今回この世に生まれてくるときに、先天的あるいは後天的に自分の体に障害が現れるように計画してきているわけです。そんな馬鹿なという方もいるかも知れませんが、本当の事なんです。私達の肉体というのは、日々刻々と変化しているんですね。細胞は、絶えず死滅しては、また新しい物が生まれてきているんです。細胞や血液、内臓などの肉体自体も生きているんですね。肉体というのは、生き物の集合体なんです。そして、こうした生き物を秩序正しく制御し、統制しているものがあるわけです。それが、私達の魂の一部なんですね。私達考えたり感じたり、おもに思考をする部分とは別にこうした肉体を制御する部分を持っているんですね。

そして、この部分が自分の肉体を創っているんです。まあ、遺伝という情報に基づく部分もかなりあると思うんですが、それ以外にはこうした肉体を制御する魂の部分が影響しているのです。たとえば、顔つきというのもこの働きに依るんです。たとえば、凶悪犯はやはり凶悪そうな顔つきがありますし、穏健な人は柔和な顔立ちをしていますね。これはもともとそういう顔つきであったのではなく、その人の生き方がそれに応じた顔を創って来たのです。結局、自分の想いが自分の顔を創っているんですね。

それで、この肉体を創造する部分にあらかじめ肉体の障害の計画をしておいて生まれてくると、その時期になるとそうした病気や障害を起こすわけです。ただ、本人の思考する部分の意識は過去の記憶を一切消されていますから、突然、病気や障害が自分にふりかか

ってきたように思うわけです。そして、そうした厳しい境涯の中でどれだけ有意義な人生を送れるかを試すわけですね。前述のヘレンなどはそれ以上に、他の人々の模範となるような生き方をする事を計画していたわけですね。

以上が精神的な原因による病気の場合ですが、これがほとんどなんですが、あと肉体に起因する病気もあることはあります。事故や怪我などもそうですし、そうした傷が化膿して起きる病気もあります。こうしたものは肉体から起きる病気であると思います。このような様々な要素が複雑に融合されて私達に色々な病気が巡ってくるわけですね。

そして、大切なことはこのような病気の時に私達がなすべき事は何かという事ですね。いたずらに心を悩ませ、葛藤の中に沈む事ではないわけです。こうした境涯の中で、これに負けず、さらにこれを跳ね返すような生き方を期待されているのです。病気そのものはね、どうする事もできないかも知れません。でも、心まで病気になってはいけないんですね。病気の中で健全な心を守り、明るく、希望を持って生きる。これが大切なんですね。普通の人と同じように、できればそれ以上に明るく、強く生きられたとき、今回の人生は成功であったと言えるんです。これを目標に生まれてきているわけです。

ですから、こうした人々には私は悩んでいてはいけませんよと言いたいんです。それでは意味がないんですよ。そのような境涯を乗り越える事を期待されているんですよ。と、言いたいのです。

第2節　家族の病気の悩み

今度は、家族が病気になってしまった場合の悩みについてです。

①　家族の病気そのものが心配で悩みになっている場合

まず、家族の病気そのものが心配でしようがないという場合ですね。たとえば、心臓発作などで倒れた場合などは当然心配しますね。また、腫瘍などで手術を受ける場合なども大丈夫だろうかと心配するのも当然です。

こうしたときには、その心配の本質は病気になった家族の生命の存続の如何ですね。死ぬような事はないだろうか、あるいは後遺症が残って体が不自由になったりしないだろうかというのが心配の中身であろうと思います。これが、快復して、あるいは全治してもどうりの体になって帰ってきてくれれば、消える種類の心配ですね。

この場合に心配するのは、やむを得ないと思いますね。家族なんですから、あるいは親類でも同じかも知れませんが、こうした人達を思いやる心そのものは愛の心なんです。愛の気持ちの裏返しとして心配や悩みが出てくる場合もあるんですね。

ただ、心配や悩んでいるだけでは何の役にも立ちませんね。できれば役に立つ事をしたいと思いますね。このときにできる事は看病をするか、見舞いに行くかくらいですね。残念ながら病気そのものを治すような事はできません。

しかし、病気というのは、前節でも説明したように精神的な原因によるものがほとんどなのです。その病気の原因となっている心の葛藤や性質を変えるきっかけを与える事はできますね。たとえば、こうした神理などを病気の人に知ってもらって死への恐怖を拭い、

天国へ還る事の素晴らしさを教え、この世の人生の意味を教えるといままでとはまるっきり変わる場合があります。どちらかといえば、暗く沈みがちであった人が、吹っ切れたようにさっぱりと明るく変わったりして、家族をびっくりさせる場合も現実にあるんですよ。そして、そうした明るい心で静養を続けている内に本当に病気が治ってくる場合も結構あるんです。

ですから、できれば神理を教えると良いんですが、それができないならば、本人の心を明るく、強くするように努める事ですね。その際に病気に触れないように、わざと避けたような態度を取るよりも、そのような病気に対していったん受け入れ、それを跳ね返して行くような気持ちを出させる事が必要なんです。これは、はっきり言って非常に難しいです。本人は病気の不安でいっぱいですから、これをこうした気持ちにさせるのは困難を極めるでしょう。

もちろん、本人も苦しいわけですが、愛情のある家族であれば家族はもっと悲しいんですね。病気が思わしくなければないほど辛いですよ。でも、本人の前では涙を見せるわけにはいかないので、何でもないように軽く振る舞うんですが、それが本人にはよそよそしく映るんですね。「自分がこんなに病気で苦しんでいるのに、家族はあまり気にしていないようだ。自分はなんとかわいそうなんだろう。」と悲観してしまうんですね。そうした本人の態度を見ると、家族はもっと悲しくなりますね。

ですから、私はあえて病気の人に言いたいんです。あなたが病気になったのは家族のせいですか。そうではないはずですね。家族は病気になった、あなたを心配し、看病してくれているはずです。これ以上、家族を苦しめるのは止めて下さい。あなたが病気で不安な

気持ちはわかるけれど、だからといって家族まで苦しめてもいいのでしょうか。人間はね、誰でもいつかは必ず死ぬんです。でもね、死ぬという事は命がなくなるという事では決してありません。私達の命は、この肉体の事ではなく、肉体の中にあってこれを動かしている生命エネルギーなのです。物質じゃないんです。

エネルギー自体が命の本質なんですね。だから、消える事がないんです。エネルギー不滅の法則ですね。死んだ後はね、あの世とも呼ばれているようなエネルギーの次元の世界へ移るんです。この世界は物質ではできていないので私達の肉眼には見えませんし、手に触れる事もできません。でも、無いわけではないんですね。確認ができないだけです。

この霊界ではね、その人の想いの性質によって住み分けがされているんです。明るく、綺麗な想いを発している人は、天国という世界へ行くんです。そこの人々は皆そうした想いの人ばかりで、当然、回りの人達は優しく、穏和で争いもなく、欲しいものは何でもでてくると言う、そんな理想的な世界で、老いる事も死ぬ事もなく、好きな事を誰にも邪魔されずにしていられるという世界なのです。回りの風景も素晴らしいですよ。美しい草花が咲き乱れ、五月のような暖かくかぐわしい感じですね。

しかし、本人の想いが残念ながらそうした純粋で慈悲に満ちたものでなく、むしろ人を傷つけ自分だけの快楽を求めるようなものである場合は逆に大変な世界へと行く事になります。地獄という世界で様々な拷問のような責め苦を受けねばなりません。これは、閻魔大王にそこへ落とされたのではなく、自分の心の想いがその世界へ通じているからです。天国の世界へ通じていないからですね。

さて、こうした生命の真実に触れて、あなたの現在の病気を考えてみて下さい。あなた

が今なすべき事は何なのか。それは、悲しみに沈み、家族を苦しめる事でしょうか。そうした人の想いは天国へ通じるでしょうか。天国という世界は、悲しみも苦しみも無い世界なのです。そんな病気の悲しみを抱いたまま、霊界へ帰ったら天国へは行きようがないんです。誰でも例外なく死んで、あの世へ還るんです。その時に天国へ還るのと、そうでないのとは大変な違いになってしまいます。地上の人生は数十年ですが、あの世の期間は数百年です。次に生まれてくるまで普通、数百年は霊界にいるわけです。

ならば、明るく生きる事です。そんなに自分の身ばかりかわいがっていないで、少しは家族も思いやって下さい。あなたが強く、明るく生き抜く事が家族の願いなのです。たとえ、どんな事があろうとも最後の最後まで、明るく強く生き抜く、それが大切な事なんです。そのように生きていく時に、病気というものは消えていく場合も多いんですよ。なぜなら、病気のほとんどは私達の心が創造したか、呼び寄せた場合が多いんですね。霊的な憑依による場合などは、こうした心で生きていると、その悪霊や動物霊は憑依していられなくなります。心の波長が会わなくなるからです。そんなピカピカ光っている心には彼らのような暗くじめじめした霊は長くついていられないんですね。離れて行くんです。

だから、一挙両得なんです。自分の心は素晴らしくなって、いつ死んでも天国へ還れるようになるし、病気は治ってしまうか、あるいは快復に向かうし、家族も当然喜びます。

シェークスピアは悲劇ばかりを書いていますが、彼はあのような悲劇の底をブチ抜いたときに逆に光がでてくると言っているんですね。悲しみや苦しみから逃げていては、幸福はやってこないんです。こうした苦難や困難にもめげずに、明るく、強く生き抜いたときに、逆に幸福がやってくる場合があるんです。そして、この幸福は何不自由ないようなぬ

るま湯的な幸福ではなく、エベレストの山頂を極めたような充実感に溢れた幸福なんです。これをね、シェークスピアは問いたかったんです。こうした悲しみや苦しみの底にも実は幸福というものは現れてくるのだと、そしてそれは非常に価値ある幸福であるんだと言いたかったんですね。

②　病気で入院した人の為にお金や仕事などの処置に悩む場合

次は、入院費用や仕事などの代わりの問題ですね。これはね、多くを語る必要はないと思います。要は、家族の団結ですね。家族が一致団結してカバーしていくしかないですね。その時には、親戚や近所の人達も援助してくれるでしょう。人間というのは、そんなに薄情な人ばかりではありません。また、現代であるならば、社会福祉もかなり充実してきていますから、大丈夫です。飢え死にするような事はありません。ぜいたくはできないですが、質素に謙虚に生きる事です。何とかなるものですよ。

でも、あまり頑張りすぎて体を壊すような事のないように、長距離走だと思ってやる事ですね。仕事も看病もと、普段より体も疲れますから、無理をせずに、みんなで交代制にするとか、長続きする体制を取って下さい。本人も病気と戦っているんですから、家族も間接的に戦う必要があるんです。決して負けないように、頑張って下さい。

第３節　死への不安

病気というものが最終的に象徴するものは何かと言えば、それは肉体の死でしょう。この節で私が皆さんに訴えたいのは、死とは決して恐れるべきものではないという事です。

現在は唯物論の時代ですから、人々の常識は「死んだら終わりだ」ですね。この世で最悪の事柄が自分の死です。それ故に、死から救う職業として医者は非常に貴ばれてきたのも事実です。そして、現代の科学では死後どうなるのかわからないために、死ねば生命も消滅してしまうと一般には解釈されているようです。

ところが、その反面人々は幽霊であるとか、お化けであるとかを恐れます。そして、お盆には先祖供養をしたり、葬式には長いお経を上げてもらって故人の成仏を祈ったりしています。頭では幽霊やあの世の世界などあるものかと思っていながら、かといって葬式をまったくしなかったりはできないものですね。初詣にしても、神社参りにしても、こんな事をして本当にご利益があるのかと思いながらもやっているのが普通の人ではないでしょうか。

このようなあの世の世界や、霊や、神様というものは本当に実在する物なのでしょうか。この問に対する答が不明確になっているんですね。現代は。結論を言いますと、これらはすべて実在します。いや、実在すると言うよりは、この世の、この物質の世界の方が特殊な世界なのです。この世がその存在を疑われるべき世界なのです。いわゆる、仮の世界なのですね。たとえて言えば、劇場の舞台のようなものです。通常の生活とは別に特別の目的を持って創られた世界なのです。

では、その特別の目的とは何かと言うと、それは、人々の幸福と繁栄なのです。こうした姿を演じるためにこの世の物質の世界が舞台として用意されたわけです。この用意した

方が神であり、用意されて色々な役割を演じているのが、その子供達であるわけですね。神という巨大な生命エネルギーが多数分散していって宇宙や星雲に宿り、それらの生命エネルギーがまた、分散していって恒星や惑星に宿り、それらの生命エネルギーがまた、分散していって人間や他の動植物に宿っているんです。

この生命エネルギーの分散というのは、パイを何切れかに切るようなそんな分かれ方ではなく、たとえて言えば、マッチの火でろうそくを何本も灯せるように、マッチの火そのものは減りませんね、減りませんが、その火は新しい火を確かに生んで行くわけですね。このように、生命エネルギーも新しい生命エネルギーを生んで行けるんです。そして、自分は自分として存在できるんですね。ただ、このようにして分散した場合、子供の方はどうしてもレベルが落ちるんです。そして、親の方も若干落ちますね。

この生命エネルギーのレベルと言いますか、総量と言いますか、表現が非常に難しいんですが、まったく同じ様なコピーはできないわけですね。少し、基よりは劣化するんですね。複写機でも同じですね。何度もコピーを重ねていくと、だんだん鮮明さがなくなって行って、最後は字が読み取れなくなってしまいますね。ですから、私達人間も神から分かれた同じ種類の生命エネルギーなのですが、何度も分散を繰り返しているために、基の神よりはだいぶレベルが落ちているわけですね。

だから、色々とわからない事があったり、できない事があったり、創造できない物があるわけですね。でも、こうした状況は不変の姿ではなく、努力によって向上していけるんです。進化という事ですが、自らの努力により、自分自身を進化させる事ができるようになっているんです。生命エネルギーのレベルが上がるという事です。それには、子供が遊

んでばかりいては一向に成長しないように、教育が必要なんですね。教育して、その極意を伝授するのが一番手っとり早いんですね。その教育に当たるのが、この世の人生であり、学校に当たるのがこの三次元の物質の世界なのです。

この生命の真実を今はっきりと認識して欲しいんです。人間というのは、私達の本質である生命エネルギーが肉体という物質に宿った姿であるわけです。そして、地球という環境を与えられて、進歩や調和によって繁栄をもたらし、幸福に暮らせと言われているんです。

ですから、死とはこの世の物質世界から本来の生命エネルギーの次元の世界へ還るという事を意味するものであり、消滅する事ではないわけですね。還ると言ってもね、天のどこか遠くへ行くわけではありません。この同じ地球の中に物質の世界とエネルギーの次元の世界が同居しているわけですね。状態が変化するだけです。物質という不自由なぬいぐるみを脱ぐだけなんですね。すると、自由自在に動き回れるようになるわけです。これが、本来の霊の状態なんです。

これが真実なら死とは恐れるべきものではないですね。死とは本来の世界へ還る事を言うのですから、恐れるのは、死ではなく、本来の世界へ還れない事を恐れるべきですね。この意味でこの世の人生に寿命があるという事は本当は神様の慈悲なんですね。この世の苦しさから解放される瞬間なんです。ただね、すべての人が天国へ還れるとは限らないんです。天国へ行けるような心を持った人だけなんですね。天国へ還れない人は地獄というもっと苦しい世界へ行く事になります。ですから、地獄へ落ちる人にとっては死とは地獄への旅立ちを意味するものであり、辛いものですね。

このように考えてみると、死とはこの世の生活から離れてあの世へ行く事だと言えるでしょう。そして、その行き先を決めるのはこの世の人生の生き方であると言う事です。天国も地獄も、現在の自分の生き方次第なのです。だから、こうした神理が必要なんですね。模範的な生き方を示しているわけです。このように生きれば天国の良いところへ還れますよと言っているわけですね。

まず、神理を知る事です。そして、次に自分の永遠の生命を信じる事です。このときに初めて人間は単なる二本足で立ち、少しばかり知能が発達した動物ではなく、神から分かれてこの世の物質の世界へ繁栄と幸福を創造する担い手となるんです。神の子として生きるという事ですね。神様が望んでおられる方へ向かって進んで行くという事です。この死からの束縛を絶たないとどうしてもそれができないんです。わずか数十年で消えていく様な価値のない命であっては、回りの人々や社会の幸福を願う事よりも自分の利益が優先してしまうんです。

死からの精神的な束縛を絶ち、人生の意味を悟ったときに、もはや私達は神の子として明るく、強く生きるしかないんです。地獄などはそれがわからないままに死んだ人が行くところなんです。神の子として生きた者は天国へ還るしかないんです。

さあ、今こそ私達はこの精神的な鎖を解き放つべきなんです。鉄の鎖で自分自身の体をがんじがらめに縛っているんです。これを断ち切って自由になる事です。その時に心はもう既に天国に遊んでいるわけです。天国という世界は幸福な世界なんです。私達も幸福になるのは当たり前なんですね。これがすべての基本です。永遠の生命を持つ私達が神理に沿うような生き方をするべく、この世に生まれてきているんですね。

だから、病気というのはこれに気づくための一つのきっかけなんですね。順風な毎日ばかりでは人々は流されて生きてしまうんです。人生の意味など考えないで、その日、その日を何となく過ごしてしまうんですね。そして、死んでから後悔するんです。「生きている間にもっと努力しておけば良かった」と思うんです。こうした傾向のある人に、一つのきっかけを与えているわけですね、病気というのは。病気になって自分の生命を不安に思うとき、自分の今までの人生ややり残した事などを考えて、どうしても内向的になるんですね。このときに、こうした神理に目覚める可能性もまた高いわけです。

病気というものをきっかけとして黄金の人生が開けてくる場合があるんです。だから、病気というような一見悪と見える存在が許されているわけです。これによって人々が悟りのきっかけを得る事もあり得るからですね。

第４章　仕事における悩みの解決のために

第１節　なかなか出世しない悩み

仕事という事を考えていく時に、出世という事は希望ですね。働きがいとして出世があると思います。だから、誰でもできれば出世したいと思っているわけです。ところが、どういう訳か自分はなかなか出世しないという場合にはそれなりの悩みになる事もありますね。

でも、まず仕事という事について考えてみたいんです。仕事というのは、自分の生活や身分のためにするものだと思っていませんか。自分の毎日の生活が楽になるように、あるいは社会的に認められるためにするものだと思っているならば、それは大きな間違いです。もちろん、現代社会に普通に生きていくためには働かなくては生活していけないと言う事情はあります。これは事実です。

しかし、だからといって自分や家族の生活のために働くのだと思ってほしくないのです。原始時代の狩猟生活ならそういう事になるのでしょうが、現代のように経済が発達した時代であるなら、私達が働くその会社や役所などは経済活動や行政を行うところであるはずですね。企業であれば、経済活動によって様々な商品やサービスを流通させる事によって消費者の利便を図っているわけですね。役所であれば、行政の仕事の一部を担当する事によって住民サービスを図っているわけです。

このような消費者や住民というのは、私達を含めたその社会に住む人々ですね。結局、人々に快適な生活をもたらそうという目的での経済や行政であるわけです。これを忘れないでほしいのです。この会社や役所などの中で働くという事は、必然的にその目的に従事するという事なのです。

ですから、動機は確かに自分の生活のためであったかも知れませんが、その職場に入ったらその職場の持つ目的に従事しなければならないという宿命を背負うわけですね。この職場の目的に対しては、自分の個人的な感情を捨てて尽くす事が条件となるわけです。そのための見返りなんですね、給料や地位というのは。決してね、物々交換のように働いた分に対して一定の比率で給料や地位が返ってくるようなものではないわけです。自分が奉仕した分の見返りとして与えられるものなんです。交換条件のように当然貰うものでも、ストライキのように奪い取るものでもないわけです。

ですから、こうした給料の額や身分の違いで悩んでいる人のほとんどが他の人との比較において不公平だと思っているわけです。年齢や経験などから当然、一定の割合で上がっていくものだと思いこんでいるのではないでしょうか。しかし、基本的に違いはあって当たり前なのです。たとえば、企業であればその企業が上げる利益によって払える給料の額は違ってきますし、同じ企業の中でも人によってその上げた実績によって違ってきます。公平という事ですね。一律一定という間違った平等感からではなく、働きに応じた報酬という公平感で判断しなければならないのです。

そうすると「いや、自分は会社に十分貢献しているはずなのに全然出世しないのは不公平だ。」と言われる方もおられると思います。これの原因としては、二通りが考えられま

す。一つは、本当に会社の方が見る目がなくて、あるいはおかしな所で公平に扱っていない場合ですね。もう一つは自分が一種の被害妄想のようにそう思いこんでいる場合です。

一つ目の本当に不当な待遇の会社の場合ですが、これは簡単ですね。転職すればいいですね。本当に自分の能力に自信があって、どこの職場に行っても人よりもよく役に立てると思うなら、思いきって転職してみる事ですね。日本に企業など数え切れないほどあります。何もそんな不当なところで一生我慢する必要はありません。しかし、自分の自信とは裏腹に転職してみたら、前の職場の方が良かったと後悔する人もいるので注意して下さい。まあ、先の事はわかりませんから、要するに、会社に対してどこまで尽くす気持ちがあるかですね。この会社のためなら少々の事は我慢できるという職場を見つけて下さい。

次に自分が思いこんでいる場合ですが、これが実は非常に多いんです。なぜなら、基本的な考え方が他人との比較において判断しているからですね。たとえば、誰々さんとは同期で仕事もそれほど差があるとは思えないのに先に出世したという事で不当な待遇だと思いこむ例はいくらでもありますね。これはね、その人だけしか見ていないのでわからないんですね。確かにやっている事はそれほど違いはないでしょう。でも、質は大違いという事はあり得るのです。

AさんならAさんが処理している量は自分とほとんど変わらないだろうと思いますが、その処理の仕方が違っているかも知れないですね。たとえば、係長くらいのポストで数人の部下を持って仕事をしている場合などで、係として処理している仕事はあまり違いはないかも知れません。でも、その係で働く人達の気持ちは雲泥の差が出る可能性は十分あります。仕事に配慮があり、部下の面倒も十分にみてくれる係長なら仕事をしていても安心

感がありますし、仕事そのものが楽しくできますね。でも、逆に部下のミスを厳しく指摘したり、上司には良い顔をして部下には不当に厳しく当たる人などが係長であれば、嫌ですね。毎日が辛いですね。会社を辞めてしまいたいと思いますね。

ですからね、人の評価をするときはその人自身がしている仕事はもちろんですが、それに加えてその人が関係する人達にどのような影響を与えているかを見なければならないんです。そして、自分についても同じですよ。自分自身の評価をするときに、自分の経験や技術の他に、回りの人達をどのように扱っているか、また相手は自分をどのように思っているか、これを検討しなければなりません。たとえ、どんなに技量が優れていても、回りの多くの人達を傷つけているような性格の人では出世しないのは当たり前ですね。なぜなら、そんな人を出世させると多くの人が傷つく事になって会社を辞めていく人も出るかも知れないし、会社としてみたときにマイナスになるからですね。だから、トータルで判断しなければならないのですね。

結局ね、このなかなか出世しない悩みを解決するものは実力をつけるしかないんですね。でも、それは普通人々が思っているような個人的な技量だけではなく、むしろ部下や回りの人達への影響という面が大切なのです。これはね、努力次第でいくらでも良くできます。そして、すぐに効果がでます。自分も回りも楽しくなりますね。心の持ち方次第で会社の雰囲気はいくらでも変わるんです。楽しい雰囲気を持った会社は大抵発展しますね。なぜなら、社員のやる気が出るからです。そうした発展する会社であれば、発展の原因となっている人が出世するのは当たり前の事なんです。自ら求める必要はありません。出世というものは天から与えられるものだと思って素晴らしい自分を演出していけばいいんです。

それが本物であれば、必ず報われるでしょう。

第2節　仕事がきれない悩み

職場において仕事ができない人も悩みになり易いですね。他の人に比べてどうも仕事がきれないという人もある程度の割合で必ずいると思います。

こうした人達に言いたい事は、自分流のやり方を開拓しなさいという事です。仕事ができる、できないという基準は他の人達との比較において言われているんですね。あの人より、この人の方が早く処理するとか、やる気があるとか、接待がうまいとか言われているわけですね。でも、そうした見方は必ずしも正しいものではないのです。

やはり、職場というところは色々な仕事があるんですね。この仕事にはこういうタイプの人、この仕事にはこんなタイプの人というように適材適所という考え方があるわけです。すると、現在の仕事には自分はあまり向いていないけれど、他の仕事では頭角を現す場合もあり得るわけですね。組織というものはそういうものなんですね。その職場にあった人を配置しようと常に考えているんです。

ですから、まず自分の個性を生かした自分流の仕事の仕方を確立する事ですね。その時にいわゆる模範的な仕事の仕方を真似る必要はないのです。人々が憧れるようなタイプになろうと背伸びする必要はないんです。あなた独自の個性ある仕事ぶりでいいのです。神様が人間に個性を与えられたという事はそうした違いを良きものとして認め、その個性を損ねる事無く、全体が発展するときに神様の力のように強く片寄りのない潤いに溢れた職

場ができるという事だと思うのです。

よって、人々が同じ様なタイプであっては理想とは遠いような片寄った職場になってしまうと思うのです。結局、自分が持っている性格の中の良いところを仕事のやり方に反映させる事ですね。たとえば、事務的な仕事が不得意で明るく、人当たりの良い人であれば、外交的な部分に中心をおくわけですね。そして、そうした事務の得意な人と仲良くなって助けて貰う事ですね。そうすると、事務はなんとか普通にこなせますね。そして、その上に自分の得意とする外交的な部分に注力するわけですね。このようにして自分独自のやり方というものは誰にでも開拓できるものと思います。

ただ、特に自分の性格の中に良い所など無いという方もいるかも知れません。こういう人はね、次の二つを信条とする事です。すなわち、やる気と粘りです。こうした悩みを持つような人は、大抵処理速度が遅い人が多いと思います。現在のように情報化社会で人々が忙しく立ち働いている状況では、動作が遅い人というのはどうしてもマイナスと見られがちですね。しかし、この社会概念自体が決して正しいものではないわけです。他の人がどういう目でみようと、自分は自分としてやっていくという気概ですね。これを持って欲しいんです。

そして、信条としては、やる気と粘りをお薦めしたいのです。やる気のない人というのは、たとえどれだけ頭が良くても仕事がきれても長い目でみれば必ずダメですね。大きな困難がくると挫折するからです。なぜなら、そうした困難を突破してやっていこうとする意志がないからですね。だから、やる気というのは本当は一番大切な条件なんですね。それと、こうしたどちらかというと、仕事のきれない人は他の人から冷遇されているのが実

状であると思いますから、こうした仕打ちに耐えて、なお精神的に負けない事ですね。すなわち、粘りという事です。ネバーギブアップという言葉もありましたが、たとえ、どんな事態があろうとも最後の最後まで、心まで負けてしまわない事です。

そりゃあ、仕事では他の人達より劣った結果が出る事は良くあるでしょうが、心まで敗北感を持たない事です。そんな仕事は自分にはあまり向かない仕事なんだと思ってさっぱりとしている事ですね。それをいちいち悲観していると、劣等感になります。いわゆるコンプレックスですね。こうなると、ノイローゼと同じでなかなか治りませんし、色々な精神的、あるいは肉体的な障害が出てきます。

ですから、やる気と粘りを持って自分流で結構ですから、根気よくやり抜く事ですね。このときにもはや、あなたは仕事がきれない人ではなくなっているんですね。自分で段取りして仕事ができる人になっているんです。それでも、他人との比較はされるでしょうがこれはあまり気にしない事ですね。気にしたところでどうなるものでもありません。自分は自分、彼は彼と割り切っている方が良いと思います。

このようにして自分流の仕事の仕方が身についたら、後は努力で実績を上げていくだけですね。そして、この実績が上がってくれば自然と出世も与えられるだろうと思います。

まあ、地位とか出世とか給料の額とかは働く者にとっては気になるのは当然ですが、こうしたものは自分で欲しがりますと執着となって逆に自分自身を縛ってしまうので注意が必要です。この執着は、何一つ良い事をもたらしません。執着によって私達の心はその対象、たとえば地位やお金などへの欲望に満たされてしまうのです。こうなると、人々への関心や愛情などよりも欲望を満たす事の方に重点が移ってしまいます。他の人々よりも自

分の利益の方が優先するわけですね。これがエゴイズムへと発展していくんですね。

そして、与える愛などほど遠い奪う人生になってしまいます。こうなると、回りの人々からは嫌がられますね。また、自分に対する態度もよそよそしくなってきます。困ったときでもあまり助けてくれなくなります。こうした事がさらに本人を孤立させ、さらにエゴを強くしていきます。これが月日とともにエスカレートしていくと、もう他人の事などお構いなしに自分の都合だけで行動する人間ができてしまいます。

そして、この人について回るものは争いと人々の冷たい仕打ちです。なぜなら、自分が回りの人達にそのように接しているからですね。これが、返ってくるだけなんです。「立ち向かう人は鏡なり。」ですね。自分の普段の他の人を排斥するような冷たい態度が結果として回りの人々から自分を孤立させて、不幸な現象を呼んでいるわけです。

ですから、理想としてはまったく逆ですね。この世のものには欲望を抱かず、執着を絶って回りの人々に愛情を振りまくような生き方が望まれるわけです。こうなると、回りの人々に愛され、助けられて楽しく暮らす事ができますね。そして、仕事にも同様に尽くしていくとき、お金も地位もいつの間にか分相応に与えられていくものなのです。こうしたシンプルな生き方が実は発展への鍵なのです。

執着でがんじがらめに縛っているような生き方では身動きが取れずに適切な行動が取れないんですね。発展するには、その場その場で適切に行動して行かなければなりません。押すときも引くときもあります。自分の利益だけを主張して譲らないような人は大成する事はできません。その場によって、判断して行かなくてはならないのです。目先の利益を優先して相手との関係を悪化させる事がないか、より大きな可能性を摘み取る事にならな

いかを判断して最終的に最も大きなプラスを生む行動を取って行かなければならないのです。こうしていけば発展して行くのは当たり前なのです。

結局ね、まず一番優先すべきは人々の幸福を願う心です。これがあって、これを阻害しないように、また促進するように仕事を進めていくと人々から喜ばれて感謝されますね。この感謝の印としてお金や地位が返ってくると思って下されば間違いないと思います。ですから、人々に感謝されるような仕事や行動をとる事ですね。これが、感謝という形で自分に返ってくるわけです。この人々の自分への愛の想いが自分を幸福にするわけです。自分自身で幸福になろうと思ってはいけないんです。人間は自分一人で幸福になる事などできないんですね。回りの人々に信頼され、愛されて幸福になっていくものなのです。

ですから、人々を幸福にするような仕事ぶりをして欲しいのです。これが結局、自分を幸福にしていくわけです。

第3節　好きな仕事に就けない悩み

ある一つの仕事を志しているが、どうしてもその仕事への道が開けてこない場合というのもありますね。ある仕事が非常に好きであるがなかなか試験に受からないとか、資格が取れないとかで悩んでいる人もいると思います。

こうした人達に言いたい事は、期限を区切ってその間、全力を尽くしてみるという事です。3年なら3年という区切りをあらかじめ設けておくんですね。そして、その間は他の事は二の次でこの仕事に就くために全力を尽くさせて貰う事です。家族の人達に了解を得

た上で、真剣に取り組むんです。まあ、一種の浪人と同じですね。そして、アルバイトなどはしなければならないかも知れませんが、精神的にはその目的のために全力投球できるような環境を整える事です。

そして、その期間頑張ってみると良いと思います。やはり、人生は長いですからそのくらいの期間を浪人みたいに過ごしたところでどうという事はありません。むしろ、本人にとっては魂の糧になる場合もあります。ただ、これが執着となってずっとまともな職業にも就かず、人生の落後者みたいになってしまう事もありますから、期限は必ず区切ってその間にできなければあきらめる事ですね。

世の中に仕事などいくらでもあるんですから、その仕事でなければいけないと言う理由は何もありません。もっと自分に合った仕事があるかも知れません。今までの事はきっぱりと忘れて一から出直す事ですね。昨日までの自分は死んだと思って、新しく生まれ変わったつもりで新たな自分の可能性を開発していく事です。

ですから、仕事というものも本当は自分で選んでするものではなくて与えられるものなんです。守護霊の導きがあって現在の仕事があるんですね。ですから、他の人と比較して自分の職業をどうこう言うのは間違っているんですね。他の人には他の人の、自分には自分の職業があるんであって、それはまったく別のものだと割り切る事ですね。

そして、職業を選ぶ際の心がけとしては、自分の好みや給料や社会的な名誉などよりもどの職業に就けば自分が持てる能力を最大限に発揮でき、社会に貢献することができるかという視点で選んで欲しいのです。しかし、このようにして選んだ職業であっても、時代の制約や環境のためにその仕事に就く事ができない場合もあります。また、あるいは守護

霊が別の意図を持ってわざとその仕事に就けないようにしている場合さえあります。

こうした場合には、どうしても未練が残るものですね。心では諦めなければならないとわかっていても、気持ちが吹っ切れないものです。しかし、こうした中途半端な気持ちでいても何も得になる事はありません。その間の人生を無意味に過ごしているようなものです。

この世の人生というものは有限なんです。誰にも寿命というものがあり、いつかは必ず死なければならないのです。だからこそ、有意義な人生を送る必要があるんです。快楽に溺れる人生など何も有意義なものはないのです。欲望というものは絶える事がなく、次から次へと新しい欲望が生まれ、心も休まるときがなく、精神的に向上する事もなく、むしろ堕落の道を歩むばかりです。ですから、エゴイズムなど人生の最大の敵なのです。この伝染病に冒されると、せっかくの有限の人生を無意味に、あるいは逆に堕落への人生と変えてしまうのです。

よって、自分が与えられた環境の中で最大限に自分の良いところを発揮していこうと努める事です。自分が就く事ができる仕事の中で自分が最高に貢献する事のできそうな仕事を選んで欲しいと思います。そして、その仕事を精一杯やっていき、その仕事が求める以上の仕事ができるほどに自分の実力がつけば、自然と新しい道が与えられるものなんです。より大いなる仕事が与えられるんです。それは、幹部のような地位であったり、他の高度な職業であったり、人によって様々でありますが、その人にあった方法で必ず与えられます。

こうした職業を天職と言うのですね。天から与えられる職業なのです。だからこれを奪

い取ろうとしては行けないのです。実績を積んでいく代わりに与えられるものなんですね。一躍目指すところに到達しようとしてはいけないんです。一段一段と階段を昇るように近づいていくものなんですね。なぜなら、そうした階段を一段ずつ昇っていく様な努力の中にこそ、人生の本当の意味があるからです。そうした職業に就くために生まれてきているわけではないのです。そのような仕事などを通して自らの精神的な向上を目指しているんですね。そして、できれば社会や他の人々に貢献できる事を期待されているわけです。これを間違わないでほしいのです。

このように仕事というものは、単なる生活のための作業ではなく私達の人生そのものにも関わるような意味合いを持っている場合も多いのです。ですから、天職と言えるような仕事に就く事ができた人は非常にありがたい事なんですね。多いに感謝すべき事なんです。私が何度も何度も言っている勤労感謝という事ですね。勤労できる事を神様に感謝する気持ちです。これをぜひ持って欲しいと思います。

そして、仕事が気に入らない人やもっと他に好きな仕事があるのに現在の仕事しかできないでいる人も視点を変えていただきたいんですね。仕事というのは、自分の好みでするものではなくて、組織や社会に対して貢献するための奉仕なんだと割り切って欲しいのです。現在自分に与えられた仕事を期待以上にこなす事をまず考えるべきですね。これができれば、自然と自分の器に合った舞台が与えられるようになっているんです。まず、現在の仕事など朝飯前にこなせる自分になる事です。そして、より高度な仕事を受けられるような自分になる事です。そうすれば、仕事など向こうからいくらでもやって来るものです。

まあ、こうした事を参考として自分の器づくりに励んでいただきたいと思います。

第5章　教育における悩みの解決のために

第1節　子供のしつけに関する悩み

この章では子供の教育に関する悩みを考えてみたいと思いますが、最初はしつけに関する悩みです。

現代はしつけがあまりうるさく言われる事はないと思いますが、このしつけができているのといないのとでは子供の行いは大違いですね。しつけのできていない子供は、色々と粗暴な行動をしたり、他人に迷惑をかけるような行動をとったりして親を困らせるものです。

ところが、最近の両親は共働きの所も多くてなかなか子供にかかりっきりになっていられないのも事実です。ですから、子供の教育は学校がするものと思っている親も多いと思います。ところが、学校の方はいわゆる受験のための教育を中心にしていますから家庭での情操教育を要求します。そして、一生懸命知識を詰め込もうとしています。

結局、誰も真剣に子供の将来のために必要なしつけに取り組む人がいないわけですね。こうなると、子供は精神的に野放しにされているのと同じです。立派な大人に育つ方が不思議ですね。そして、こうした人が成人して親になって、自分が受けた以上の教育を子供に与えられるわけもなく、その子はもっとひどくなりますね。こうして世の中が乱れてい

くわけですね。

これが悩みになるとすると、自分の子供をどのようにしつけたら良いのかわからないと言う悩みが大半であろうと思います。

これについて考えてみると、まず何を教えたら良いのかですね。いわゆる勉強は学校や塾が教えてくれるわけですから、家庭では教える必要は普通はないわけですね。すると、礼儀作法や言葉遣いでしょうか。まあ、こうしたものも少しは必要でしょうが、一番大事な事は何でしょうか。

それが、実は心構えなんですね。心構えというのがわかりにくければ、信条と言っても良いです。要は生き方ですね。どのような生き方をするのかを身を持って教えるのが家庭における最大の教育なんです。それは、親の生き方を見て子供は育つからですね。いくら口では良い事を言っていてもいつも一緒に生活していれば子供をだます事はできませんね親の生き方から子供は大きな影響を受けるんです。

それは本人が教える、教えないに関わらず確実に影響します。「子は親の鏡なり。」という事ですね。ですから、素晴らしい子供に育って欲しければ、自分達が素晴らしい生き方をする事です。その生き方を見て子供は育って行くわけですから、ごまかしは一切通用しませんね。親が正しく、勤勉に努力している家庭は必然的に良い子供が育つはずなんですね。それは、そうした体質が子供に受け継がれるからですね。

ですから、まずこの部分ですね。親が子供に良い見本となる事です。そして、その次に礼儀や言葉使いの注意があるわけですね。親が汚い言葉使いで礼儀も悪ければ、子供にそうした事を注意したところで子供はまったく聞きません。なぜなら、親がそれを守っていない事を良く知っているからです。自分だけが礼儀正しくしなければならない理由などありませんからね。

よって、子供をしつけたければまず、親がそうした人間になる事です。そして、子供に手本を示す事ですね。

これは学校では絶対にできないんです。なぜなら、先生は所詮、他人なんですね。模範的な人物としての先生であって、自分達とは一段差があるわけですね、子供の心には。ところが、親とはあまり距離がないんで、見本となるには、親は格好の存在です。

次に、何か問題などが起こったときですね。このときにどのように反省を求め、修正させるかですね。あまりきつく叱っても逆効果にしかならない場合もありますし、放っておけばどんどんエスカレートする事も考えられます。では、どうするのが良いのか。難しい問題です。こういう時にも、普段の生活が大きく影響します。

普段から正しい生活をしている子は、そうした間違いを冒したときでも筋道だって自分の非を説明してやれば独りでに反省の心が働きます。そして、できればその時に何故間違いに陥ったのか、どうすれば今後同じ事を繰り返さないで済むかを一緒に考えてやって欲しいのです。これができればね、親としては完全に合格ラインですね。

結局ね、子供に対して正しさを説教する事ができるような生活を普段から実行する必要があるわけですね。そして、むやみに叱ったり、野放しにしたりしないで、筋道だった注意を適切にする事ですね。そして、自分がそうした見本となるような態度を見せる事です。これに尽きます。

以上がいわゆる一般的なしつけに対する親の心構えについてですが、もっと高度な、子

供をひとかどの人物にしたい方のしつけの心構えについても少し説明しておきたいと思います。

まず、最初に物事の筋道ですね。これを教える必要があります。普通、子供の世界観というのは自分中心ですね。自分の感情や好みなどによって色分けしているんです。でも、こうした世界観はいつか崩れなければならないのは当然ですね。自分の嫌いな事でもしなければならない事もあるし、やりたくてもできない事だってあります。こうした自分中心のものの考え方ではなく、第三者から見た考え方ですね。色メガネの無い見方、中立な見方です。これを教える事です。

「あなたはそのように感じているけれど、他の人はどのように感じているのか考えてごらん。」という事が大事ですね。自分以外の人からみたらどのように見えるのか、そしてそれはどちらが正しい見方なのかを考えるという習慣が身に着くと、子供は急激に成長します。そして、行動に際して思慮が働くようになります。衝動的な行動が少なくなってきて、考えて行動するようになって来るんですね。そして、そうした時期により効果の上がる方法を教えてやると、ぐんと伸びますね。

どんどん自分で効果の上がる方法を模索するようになります。こうなると、後は道を逸れないように注意さえしていれば自然と成長していきますね。

ただ、すべての場合において言える事ですが、子供は親以上に優れた人物には普通はならないのです。ですから、親が本当の正しさを悟る事ですね。そして、その悟りでもって子供を早期に精神的な高みに引き上げてやれば自分以上に優れた人物に成長する可能性があります。この意味で間違った正しさではなく、本当の正しさ、すなわち神様の目から見

ても正しい人生観を持つ事ですね。現在のように間違った常識が横行している時代においては特に必要な事です。

すなわち、神理という永遠の価値をしっかりと学ぶ事が必要だと思うのです。そして、自分の感情や現代社会の片寄った価値観を押しつけるのではなく、永遠に変わる事の無い人間としての尊厳や価値の平等に裏付けられた正しい世界観を掴む事です。そして、人生の意味を悟る事ですね。この悟りによってすべてはその是非を判断されるわけです。

価値あるものとは、生活に有用なものだけではなく、私達の人生が自分の精神の向上のための舞台であるとすれば、求めるべきは精神的な成長ですから、あらゆる出来事から教訓を学んで行くという態度こそが最も貴重なものとなるはずですね。こうした心の核となる部分ですね。これを自分の中に間違いなく造り、それを子供に伝えていくだけなんです。何も難しい事はないんです。

本当に価値あるものはその存在事態が価値を内包していますから、いちいち説明して教え込む必要はないんです。自分の中に自然とその価値を認める事ができるようになっているんですね。たとえば、愛がそうです。愛など誰も教えてくれませんが、成長するにつれてその貴さを自分でわかるようになりますね。ですから、真の悟りに裏付けられた言葉は子供を生かすんですね。あの太陽の熱や光のように優しく包み込むように成長させるんです。これが本当の教育の心なんですね。決してね、テストに良い点を取らす事や近所に自慢するような子供にするためにするものではないんです。

子供の中に眠っている神様のような素晴らしい部分を滲み出させる事なんです。それが少しもないというような子供は誰もいないんです。なぜなら、人間は皆神の子であるから

です。ですから、神様の輝きの一部を必ず受けているんですね。それを発揮する事ができれば、その子は幸福になる事ができるでしょうし、親としても十分な教育を施したと言えるわけですね。

第2節　子供が理解できない悩み

次に、子供が理解できない事から来る様々な親子の断絶の悩みについて考えてみましょう。

子供の考えがわからないと嘆く親も多いと思いますが、これは基本的にわからないのが当たり前であると私は思います。親子と言えども人格は別ですし、育った年代も数十年の差があって、価値観のズレも相当ありますし、完全に理解できるわけがないですね。子供の事はわかっていると思いこんでいるのが間違いなのです。

子供は子供の世界がありますし、大人ではわからないつき合いもありますから親の常識だけで判断すると、衝突する場合も出てきます。基本的には、子供を信頼して任せるという気持ちが必要でしょう。もう、義務教育を越えるくらいの年代になったら、自主性に任せる事ですね。わからない事や困った事が出てきたら、相談しなさいと言うぐらいで普段は本人の意志に任せる事です。

どうせいつかは自分の力で生活して行かなければならなくなるんですから、早めに慣れておいた方が良いんです。もう一人前の大人と言うように扱ってやる事ですね。そうすると、子供の方も自分を信頼してくれているんだなという事で、自然と責任のある態度を取

るようになります。

そして、何か間違った事や問題の出てきたときでも、頭から叱って子供扱いしないように人生における相談役という感じで、良いと思われる対策なり意見なりをアドバイスしてやるようにすると良いと思います。そうした一連の出来事は親にとっては心配でしょうし、早く解決してしまいたいでしょうが、子供の精神的な成長にとっても大切な契機である事を忘れないで欲しいのです。こうした事を悩んで、ある時は親や先輩などに相談したりして自分で取り組んでいく事によって子供にとっては良い経験になりますし、教訓を得る場合があるわけですね。

保護者というのは、何か問題があったときに責任を取る人と思っている方も多いと思いますが、何でも肩代わりすれば良いというものではないわけですね。あえて、子供に解決させた方が本人の成長になる場合も多いのです。ただ、どうしても本人の力ではなんともしがたい場合もありますから、そういう場合は一緒に行って謝って回るなり、親ができる限りカバーするべきです。でも、基本的には自分の力で解決するように仕向けるべきです。

そうでないと、体ばかり大きい子供ができてしまいますね。社会に出ても、急に色々な事を自分でしなければならないので苦しいだけですね。普段から自分の事は自分で処理して行けるような性格に育てて上げる事が本人の為には良いわけです。

ですから、親としては、まず子供を信頼する事が第一ですね。そして、大人として対等につき合ってあげる事。その代わり、自分の問題は自分で解決して行くようにさせる事。ただし、相談には十分乗ってあげる事です。このように扱ってやると、子供は大人になって行かざるを得ないんですね。最初は、無理に大人扱いしているように感じるかも知れま

せんが、これが不思議な事に時間とともにギャップがなくなって来るんですね。だんだんとそうした人物になっていくんです。

早く大人にしたければ、大人として扱う事です。そうすると、次第にそういう風になってしまうんです。結局、そうした想いや態度が子供を大人に創造して行くんですね。こうやって早めに大人になっていく子は社会に出ても適応性がよいし、それほど苦しまずに済むんですね。

次に、子供の側から見た心構えはどうあるべきかという点について考えてみると、親というものが象徴するものは何かという事ですね。これは実は、愛情なのですね。親という最も身近な存在からまず、愛情を学んで成長して行くようになっているわけです。人間には愛というものがどうしても必要になっているんですね。これ無しでは生きて行けないんです。

ですから、子供は親から愛情を受けて成長していくんですから、親に対しては謙虚になるべきですね。甘えても結構ですが、虚飾はいけません。不平や不満からの様々な不和はいけません。こうした行動はたとえば、親の愛情をあの太陽の光であるとすれば、この恵みの多い太陽の光を避けて暗いじめじめした日陰でこそこそしているのと同じなんですね。明るく、暖かい太陽の光の中で明るく育ってほしいのです。自らそうした恵みを拒否して不幸になって行くのは本当に愚かだと言わざるを得ません。

素直に愛情を受けてほしいのです。そして、その暖かさを感じて下さい。こうして成長していき、人々や社会に対して愛を提供できるような人間に育っていってほしいのです。もちろん、人生には色々な障害が現れてきます。そうした障害を経験して自分で考え、行

動していくところから成長というものは達成されていくからです。そして、こうした時期には当然苦しいですが、そんなときに親の愛情が一つの心の支えになるようになっているんですね。

ところが、素直に親の愛情を受ける事ができない子供は、こうしたときに頼る人もなく本当に孤独なんですね。そして、良い結果が出るわけもなく、こうした悪い結果を両親や回りの人のせいにしてますます悪くなっていってしまうんです。両親や回りに対して暴力をふるったり、自棄的な行動が多くなってきます。やけになっているんですね。心の支えがないからです。だから本当は寂しくて仕方がないんです。でも、それを正直に表現できずに暴れているんですね。

何もかも謙虚に素直に親の愛情を受ける事ができなかったからですね。これがその後の人生を暗くしてしまった訳です。まあ、本当に両親の出来が悪くて、子供に愛情をまったくかけないような親もある場合もありますが、こういう場合は完全に親の責任ですね。親が間接的に子供をダメにしているんです。子供というのは、親の愛情を十分に受けないとまともに育たないようになっているんです。

ですから、家庭がどれだけ調和しているかはその愛情がどれだけあるかを見れば大体わかるんです。親がどれだけ子供に愛情を注ぎ、子供がそれを受けてどれだけ純粋に育っているかですね。子供の心というのは、本当は天使のような純粋で屈託の無いものなのです。それを様々な軋轢の度に黒く汚して歪めて行くんですね。でも、家庭が調和していてこうした家族の心の痛みを解消していく家庭に育った子供はそれほど心が汚れません。純粋な心を持ったまま大人になって行くんです。

このことが実は本当に大切なんです。純粋な心を失った人間が社会を歪めて行くからです。自分だけの欲得のために色々な悪の行為を平気で犯して行くんですね。これが社会を悪くし、その中の人々に不安を与え、さらに悪を助長するようになるわけです。人間には生まれつき、平和や幸福を願う純粋な心を持って生まれてきているんです。これは例外がないんですね。

この宝物のような心を育んで欲しいのです。大人になるまで。それが親としての最高の責任ですね。

第6章　神理伝道に関する悩みの解決のために

第1節　家族の妨害に対する悩み

神理という言葉自体を知らない人も多いでしょうが、神様の御心の事ですね、宇宙を統べる神の理法の事です。これは、この宇宙や星や私達人間を初めとする生物の命を偶然の産物と考えている人には到底理解できないでしょうが、宇宙のありとあらゆる物や、あの世とも言われる異次元の世界を創造した神を信じる人達にとっては根本的な事柄であるわけですね。

すべては神の創造物であるわけです。この世もあの世もありとしある物すべては神の創造した物であり、生命そのものは神の生命エネルギーが分散してできたいわば分身なんですね。もちろん、証拠などありません。

でも、これが真実か偶然に生まれてきたのが真実かでは大きな違いがあるんです。それは、私達人間の心の持ち方の違いです。偶然に生まれてきた生命であるならば、誰に感謝する事も必要ないですね。何せ偶然なんですから。そして、やがてその偶然の命は死んで消滅していくわけですね。この世に偶然生きた事を喜ぶべきなのか、死ぬという事を味わわなくてはならない事を悲しむべきなのかはわかりませんね。

そして、こうした人達は自分の生命の継続を最高の願いとせざるを得ないんです。つまり、死という生命の消滅を最も恐れるわけですね。このため、生きている間に少しでも良い目をしなければ損だというエゴイズムが台頭してくるわけですね。そしてお互いに傷つけ合ったり、争ったりして自分の利益を優先するわけです。この結果、世の中には犯罪や

弱い物いじめやその他、愛の無い社会が出現するわけですね。

ところが、神理ですね。神によって創られた世界であり、私達人間の生命も神と同じく永遠不滅の命だと信じる人にとっては、どうせこの世は仮の宿なんですね。一時の経験であり、幻のような世界なんですね。ですから、この世で欲に振り回されてエゴに走ったりはしません。また、この世やあの世での生命の存続を神に与えられた命と知っていますから、自然と感謝の気持ちが出てきます。ですから自己中心的な考えからはほど遠くなるわけですね。そして、他の人のために尽くしたり、愛他の行為もできるようになりますね。

大変な違いですね。出てくる結果だけを見て言うと、どちらが社会全体にとって良いかははっきりしていますね。エゴの生み出す社会は最悪です。人々が闘争と破壊に走るのは目に見えているんです。でも、神理によって形作られる社会は人々が神への感謝に満ち、お互いを神の子として尊重し合う社会になります。許し合い、助け合う社会ですね。

ですから、結果は神理による社会の方が素晴らしいわけです。でも、問題は信じるには信じられるだけの理論的な裏付けが必要だという事ですね。そうでなければなかなか信じられる物ではありませんね。もちろん、科学的に証明できれば簡単なんですが、現在の私達の科学レベルでは無理なんです。神の存在証明は言うに及ばず、あの世の存在さえ十分に証明できません。

このため、現在の私達には神理によってそれが納得できるかどうか判断するしかないのです。これを確かな真実として自覚でき、心の支えとして生きる事ができる人は真実の意味で有意義な人生を生きる事が可能なのです。欲望に翻弄され、他人を排斥し、自分の利益だけを追求した人生がどれほど悲しい結果を招き、大きな代償を支払わなければならないかをやがて痛感する事になるのです。地獄という世界は確かに実在するのです。それは、どこかの世界にそのような特別の世界があるのではなく、私達の心の創造作用により創り出された世界であるのです。

私達がこの世に生き、あの世など無い、神などいないとエゴイズムに生きて苦しみの中に死ぬと、その時の苦しみの波動によってそのような世界が創り出されるのです。だからこそ、幸福を心の中に創るべきなのです。自分の心の中の幸福がそのまま天国の世界に通じるわけですね。そのような幸福な人々ばかり集まったところを天国と言うのです。だから、天国に還る事など簡単な事なんですね。本当は。自分が幸福に生きていれば天国に行くしかないんですね。そうした世界なんです。心が中心の世界であるのです。この世もあの世も。

この世の物質の世界は、試しの場であるのですね。肉体という不自由なぬいぐるみを着せられ、様々な欲望や本能を背負い、生き方を試されているんですね。人間としての素晴らしさを少しも発揮せずに生きる人はまるで動物さながらの生きざまとなります。逆に、欲や本能に振り回されず、愛や慈悲に生きた人は神様のごとく光輝いた人生を送る事さえできるのです。すべては心の現れです。素晴らしい心で生きている人は、この世にありながらもう既にその心は天国に通じているんですね。

その素晴らしさを取り戻すために、神様のような心を取り戻すために、神理が説かれるんです。神の子としての尊厳と自信に目覚めさせるためです。そして、こうした神理により悟りを得た人々により、人類の歴史は切り開かれていくのです。こうした人々により正しい方へと軌道修正されて行くのですね。

ですから、こうした神理は地球上で私達が地上の人生経験をする上でどうしても欠かす事のできないものであるわけですね。無くてはならない物なのです。たとえ、わずかでもいつの時代も守られているべき神聖なものであるんです。そして、これがどれだけ正しく、広く守られているかによってその文明がどれだけユートピアに近いかが決定されるわけです。

こうした事を前置きとしてこの神理の問題を考えてみたいと思います。

まず、家族の妨害に対する悩みという事ですが、これはある程度やむを得ないんです。特に現代のように、間違った宗教があちこちに乱立し、多くの犠牲者が溢れている状態では家族が反対するのは何も不思議はないですし、もっともな事ですね。間違った宗教に入って狂って行くよりは「さわらぬ神に祟りなし。」ですね。近づかないのが賢明です。でも、これは最悪を防ぐ手段以上のものではない事もまた事実です。今回の人生を最高のものとするためには、素晴らしい神理に触れて悟りを開くのが最も手っとり早いのです。

ですから、ここでまず最初の関門となるわけですね。家族の反対、妨害に対してどのように対処するか、これが一つの課題となるんです。

これには口でいくら説明したところで決して納得しないでしょう。こちらが熱心に説得しようとすればするほど警戒するはずです。悪い宗教に引っかかって洗脳されてしまったと思い込むでしょうね。これを言葉で納得させられたら大したものです。あの釈迦でさえ父王や妻を説得できずに何年もの間城から離れて修行していたのですから、普通の人にこれをやれと言うのが無理だと思います。

では、どうすれば良いのか。それにはね、まず自らが立派に変わる事です。そうした神

理に触れて悟ったならば人からみても尊敬されるような人間となる事ですね。そして、この子をこんなに立派にしたんだから間違いの無い教えに違いないと言わせるしかないですね。すぐには無理でしょう。何年もかかるかも知れません。でも、これが本道なんです。それが本当に素晴らしいものであるなら、色々と理屈を言うより証拠を突きつけるのがいちばん早いんですね。自分自身が数段優れた人格者となって家族を包み込む事です。そうすると家族は体でそれを感じとりますから、自然と認められるようになって行くはずです。

そして、こうした人達から家族や友人や回りの人々へと神理は伝えられ、受け入れられて広まって行くんですね。これが本当の伝道なんです。伝道とは単に神理を述べ伝える事ではなく、自分自身の身を持ってその効果の素晴らしさを教え、その幸福感によって自然と広がっていくものなんです。押し売りのようなものではいけないのです。その正しさ故に、その素晴らしさ故に、自然と広がっていくものなんです。それが思うように広がらないと言うならば、それはまだまだ自分が十分に神理を体現していないと言う事なんです。もっともっと幸福に、素敵に変わる必要があるという事です。

ですから、どんな妨害にあっても決してひるまず、こつこつと自分づくりと回りの人々のためにできる事をして上げる事ですね。こうした行為の積み重ねがやがて大きな実績となるんです。くじけずに頑張って下さい。

第2節　なかなか伝道できない悩み

神理伝道についても悩みは多くて、相手になかなか真意を伝える事ができないで悩んで

いる人も結構あるようです。こうした場合に言える事は、自分としては一生懸命に全力を尽くしているつもりなんですが、相手にはあまりにも心の持ち方にギャップがありすぎてこちらの言う事が納得がいかない場合も多いのです。つまり、相手と自分の心の溝が大きすぎる訳ですね。こうなると、相手はこちらを自分とは別の世界に住む人間のように感じますから、あまり興味も関心も持ちませんね。このような状態でいくら熱弁をふるったところで相手は決して心を開く事はありません。伝道できないという事です。

このようなときには、自分の主張を止めて相手を良く見る事ですね。そして、相手の関心のある分野からゆっくりと入っていくんです。求めていない人に与えるという事は大変難しい事なんですね。ですから、まず相手に求める気持ちを出させる事が肝心なんです。求める気持ちとは何か。いったい何を求めるのか。それは、自分自身の生き方であり、幸福になれる方法なんです。これを真剣に考えてみようという気持ちを出させる事が最初の仕事なんですね。これができなければ伝道という事は成就し得ないんです。

これにはね、相手の立場になって考えてみる事です。そして、相手が幸せになるのに今何が必要なのかを検討するんですね。それには、相手の性格や行いを研究する事も必要ですし、どんなところに関心を持っているか、何を考えているか知る事も必要でしょう。こうした検討を繰り返して、相手を幸福にするような神理を説く必要があるわけです。それは、お仕着せのような説き方ではなく、相手を良い方向へと導くような説き方が望まれるのです。それには相手の人生にとって暗い陰となっている部分を解きほぐしてやる方法と、欠けている部分を補ってやる方法と大きく分けて二通りのやり方があると思います。

まず、前者の相手の人生にとって暗い陰となっている部分を解きほぐす方法ですが、こ

れには十分な洞察力と豊富な経験が必要ですね。相手の悩みを聞き、態度を見て即座に相手の悩みの根元が何処にあるかを見抜く必要があります。そして、その心の中に陰を落としている部分を消滅させていく方法を考えなければなりません。たとえば、自分の顔形や体の障害に対するコンプレックスや家庭環境への過度の不満などが引き金になっている場合も結構多いんです。

こうした場合に、相手にとっての様々な不満や悩みは実はこの部分から発生している事がよくあるんです。被害妄想に陥ったり、自分をいじめてしまうタイプの人や回りに不満を抱いてしまう人など色々な不幸な癖の原因になっている場合が良くあります。こういうときはこの根本の原因を取り去らない限り完全に悩みが消えるという事はあり得ません。

このような悩みを常に抱いている人には心の中に余裕がありませんから、神理にそれほど興味を寄せる事もないでしょう。ですから、こういうタイプの人にはまず、本人の悩みを解消してやる必要があるんです。そして、その経験を通して神理の効果を身を持って知って貰うしかないんですね。

次に、欠けている部分を補ってやる方法ですが、これにも十分な洞察力と先見の明とも言うべき先を読む力が必要ですね。相手をもっと良くしようと考えるときに、その人にとって大いに心の支えとなり自信となるような教訓を与えなければならないのです。これも非常に難しいです。でも、不可能ではありません。が、かなり悟った人でないとうまくいかないかも知れませんね。

たとえばね、人はよいが何処か弱々しい人がいますね。こういう人には、強さというものを教える必要があるわけです。また、やたらと人を攻撃してしまうタイプの人には穏や

かさというものの貴さを教える必要があるんです。このように、相手に合わせて入れれば良くなるような教えを説く必要があります。対機説法と言うのですが、その場その場に応じた最良の道を選択する力が必要なのです。

このような神理の伝道に対して悩みとするような人はもうかなり自分が神理というものに触れてその素晴らしさを実感できた人達がその報恩として他の人々にその真実を伝えようとしているものですから、この意味ではかなり自分づくりができた人達であるのです。悟った人々であると言えるでしょう。そして、次なる課題は自分だけが対象であったものが回りの人々を幸福にするという広範囲なものに変わるわけですね。このこと自体が霊的な進化に他ならないのですが、ただそう簡単には行きませんね。やはり様々な失敗や色々な経験を積んで行かないとなかなかうまく行かないんです。ですから、この意味ではこうした悩みは当たり前の事であるんです。悩んで悩んで色々と試行錯誤してみて自分なりの方法を開発して行くわけですね。その途時にあるわけです。

ただ基本的には、個人づくりの段階から他の人々の幸せを考えられる段階に成長した事だけは間違いの無い事実ですから、後は経験を積む事ですね。より多くの人々をより強く幸せにしたいとどれだけ情熱を注ぐ事ができるかで違いが出るだけなんです。菩薩とか如来と言うような人々はこうした事に相当な実績を積んでいるという事です。ですから、神理伝道を十分にこなせるようになれば自然とそうした人達の仲間入りをしてくるわけですね。こんな事実があります。

ですから、他の人々のために悩んで働いて、そうして実績を積んで行く事が結局自分自身を偉大な人へと変えていく事になるわけです。神理伝道における悩みは、その意味で偉

大なる悩みであります。大いに悩んで結構、こうした事に悩む事ができる自分はもう既に非凡な人物になっているという証です。おめでとうございます。そして、努力して自分なりの方法を編み出す事です。自分の特徴を生かした無理のない方法で一番効果の上がる方法を模索するんです。そして、こつこつと実績を積んで行く事です。

その時にもはやあなたは単なる一人の人間ではなく、神の代理人となるわけですね。多くの指導霊や守護霊に援助を受けて大きな力を発揮できるようになるでしょう。そして、神への階段を着実に昇るようになるんです。

信仰心というものは、何か架空のものを拝み奉る事ではなく、目には見えないけれども確かに実在する世界を、真実の霊的世界を確信し、この世だけの偏狭な価値観を排斥し、大いなる神の子としての素晴らしい輝ける子として生き抜こうとする事に他ならないのです。合理主義とか、現実主義とか言っているこの世の利益や地位や名誉にとらわれた人々の方が実はこの世の狭い価値観という架空の存在を拝んで盲信している人々であるんです。

真実の目を開いて世界を見なさい。そんな偶然でできているような世界では決してないんです。非常に合理的に、そして永遠の生命としての貴い価値あるものばかりで創られた世界であるんです。様々な素晴らしいものを少しづつ分散して創られた我々人間が変化をモットーとするこの物質世界の中で自己実現の場を与えられているに過ぎないのです。

信仰心と努力ですね。これがこれからのあなたに必要なものであり、またあなたを輝ける聖人へと変えていくものであるわけです。

第3節　世間の風潮に対する悩み

常識という言葉があります。普通一般には当然と思われている事柄ですが、この常識という事柄ほど当てにならないものもないのです。たとえば、死ねば何もかも終わりという思想ですね。また、人類がわずか数十万年前に猿から進化してできてきたとする思想ですね。こうした事は教科書にも載っている事柄ですが、こんな事を常識として生きている我々現代人はなんと愚かな生き物なのでしょうか。

確かに、死後の世界は普通は誰にも見えませんし、その存在を伺い知るきっかけさえないのが普通です。でも、そうした世界がないと言いきれる根拠など何処にもないんですね。単に、確認する事ができないから認められていないだけです。しかし、私達が認めようと認めまいとに関わらず、あるものはあるんですね。その存在を知らずに、井戸の中の蛙のごとく生きているのが現在の私達人間であるかも知れないのです。

知りたくない人に無理にその存在を信じろとは言いません。でも、現在、自分が様々な苦しみを抱いて生きている原因がこの部分に起因しているとしたらどうでしょう。そうです。私達の苦しみのほとんどは、有限の命という部分に起因しているんです。死にたくないと言う苦しみ、自分だけは生きている内に人より良い目をしたいと思う苦しみ、身内が死んでもう永久に還ってこないと思って嘆き悲しむ苦しみ、こうしたものの根本の原因は有限の命からくるはかなさが原因となっているわけですね。これが大きく影響しています。

あと、いくらでもおかしな常識はあります。それはこの自分の命を有限だと思い込んでいる、この根本の間違いに端を発しているわけです。ここから大きくずれて来ているんですね。だから特にここで言いたいのは、自分の命をたった数十年しかないはかない命が偶

然生まれてきた存在だと思い込むなと言う事です。それを証明するものは何一つ無いんです。なぜなら、死という事が生命の消滅を意味するとは限らないからです。生命と肉体とを混同してはいけない。肉体は滅んでもその肉体を操っていた意識は、魂は本当に消滅したと言う証拠などありません。

この肉体と生命とを同一視しているんですね。ほとんどの人が。たとえば、ここに花なら花の種があるとしましょう。そして、一つは大切に保存されていた種で、もう一つはひからびてしまった種だとしたらどうですか。大切に保存されていた方の種を地に蒔いて、水をやればやがて芽が出て、花が咲きますね。でも、ひからびた種は地に蒔こうが水をやろうが芽も出ませんし、花も咲きません。この違いは何に起因するのでしょう。

それは明らかに種自体の状態の違いですね。一方の種はその中に生命が宿っているわけです。でも、他方は生命の宿っていない抜け殻にしか過ぎないわけです。見かけはそれほど違わないかも知れませんが、中身は大違いなんですね。生と死があるんです。結論としては、生とはその存在の中に生命が宿っているものであり、死とは生命がその肉体を離れる事を言うわけです。

この肉体に入ったり、抜けたりする生命とはいったいどのようなものなのでしょうか。これは自由に物質に入ったり抜けたりするんですから、当然物質ではありません。一種のエネルギーなんですね。意識体と言ってもいいです。思考したり感じたりするエネルギーが物質に宿っているんです。これが生物の本当の姿なんです。

そして、このエネルギー自体はエネルギー不変の法則が示すように決して消滅する事の無い存在なんです。この永遠の生命がこの世の物質世界に体を借りて様々な経験をしてい

るんです。これが真実の世界感です。

すると、現代の風潮はあまりにも間違っていますね。人間を偶然生まれてきた動物と定義しているんです。そして、死にたくない、死にたくないと様々な悪を繰り返し、また他人を排斥し、自分の利益だけを求めています。なぜなら、いずれ死ぬ存在だと信じているからです。生命自体がなくなると思っているんですね。だから、生きている間に最大限に快楽を味わいたいんです。そのためには他人の利害より自分の事が優先するわけですね。自分さえ良ければいいという考え方にならざるを得ないですね。これがエゴイズムの淵源なんです。

このエゴイズムが人々を争いへと導き、動植物や環境を破壊へと導いている張本人なんですね。全体の利益を優先しようとしないからです。それぞれの利益が優先している結果ですね。

このような間違った社会はやがて自ら滅亡していく他ないですね。やがて共食いを始め、お互いに滅びて行くのが結末です。だから、今こそ勇気を持って変えていかねばならないのです。間違った社会と戦わねばならない。それが本当に正しいものであるならば、必ず道は開かれるはずです。

これからの１０年から２０年はこの社会の末期症状と変革のエネルギーの両方の相克が起きてくる時代になるでしょう。人々が殺し合い、争い合う中で真実の教えが着実に広がっていくでしょう。悲惨な情勢と悲しい知らせと共に神理に胸を打たれる人々が確実に増えていくはずです。そして、その怒涛のごとくの情熱がやがて社会全体を包み込もうとするでしょう。

いくらかの戦いもあるでしょう。混乱もあるでしょう。そして、古きものは滅び、新しき秩序が生まれてくるのです。それは、神理に基づいた社会です。すなわち、人々が自分のためだけではなく、回りの人達の幸せのために愛情を注ぎ合う社会であり、この与えられた命を神様に感謝しながら謙虚に生きる社会です。

こうした変革の時期に当たっているわけですね。現代は。ですから、私達がこれから取るべき態度は、現在の間違った社会の風潮に迎合する事ではなく、そうした間違いをはっきりと自覚し、自らは正しい生き方を心がける事です。回りの人達にどう言われようとも、信じる生き方を断行する事ですね。神理に基づいた生き方です。

そして、できる事なら、こうした神理に基づいて強く、正しく生きる仲間を増やして行きたいものです。こうした人達がいるという事自体が社会に取ってはプラスなんですね。なぜなら、彼らの願いは人々の幸福と素晴らしい社会ですから、こうした願いに基づいて活動してくれれば社会にとって有益なんですね。神理を広げるという事は大きな意味合いがあるわけです。人々を素晴らしく変えていくという事、そしてその素晴らしい人々が回りの人達を幸福にしていき、やがて社会全体がユートピアへと変貌していくわけです。

最初は小さな波紋ですが、これがだんだん大きくなってやがて世界が変わって行くんです。過去の歴史もいつもそうでした。ルターの宗教改革やキリストの愛の教えなど最初は一人の人が言い出した事です。でも、それが多くの人々の心をとらえて世界が変わって行ったんです。このことを忘れないで欲しいのです。

たとえ、どんな妨害や中傷や阻害があろうとも自らの心の中に不滅のユートピアを築く事です。神様への信仰に基づいた他の人々を愛し、争いの心もなく、疑いも、妬みも無い

純粋な心です。これがユートピアの心なのです。この心を持った人で社会が埋まればそこにユートピア社会が出現するんです。こんな簡単な事です。しかし、実に難しい事でもあります。

現在のように唯物論が常識の社会にこうした神理を広げる事がどれほど困難を伴うものかわかるでしょうか。強く強くならねばなりません。そして、最後に勝利する決め手はやはり信仰心なんです。信仰心というのは、どんな妨害にも揺るがず、どんな困難をも突き抜ける不滅のパワーなんですね。この世の事しかわからない私達には信じる事しかないのです。でも、この信仰を試されているに過ぎないのですよ。この世の人生と言うのは、実は一言で言えば、自らの信仰心のテストに過ぎないんです。

第7章　幸福への扉

第1節　悩みの克服

幸福とは何でしょう。お金がたくさんあって、大きな家があって、立派な職業に就いて、そうして得られるように考えてはいないでしょうか。

この本を通して語りかけたい事は、幸福とは、そんな事で得られるものではないということなんです。幸福とは何もない、平凡な毎日の中に感じる事のできるものなんです。ただ普通の人は、幸福というものを実感するには目先に様々な悩みがあって、そうした悩みが解消されなければ無理なんですね。

いや、もっと積極的な言い方をすると、現在あなたが悩んでいる事柄の中に幸福の扉を開ける鍵が隠されているという事なんです。

現在のあなたの悩みは決して、偶然自分に降り懸かった火の粉でも他人のせいで陥れられた環境でもありません。あなたの悩みは他ならぬあなた自身が招いたものであり、あなた自身の人生の課題でもあるのです。たとえば、恋愛の悩みにしても、相手のせいで自分が悩んでいると考えてはなりません。そうした自分を悩ませるような相手にさせたのは自分のせいかも知れません。

私は、多くの機会につけて、人間には永遠の生命があり、この世とあの世を輪廻していると語っています。現在のこの悩めるあなたは、そのまま過去のあなた自身でもあったのです。そして、そのことに気づかずこのまま流されて生きて行くなら、未来のあなた自身

の姿でもあるのです。つまり、過去世においてやはり同じ様な問題に悩み苦しんだ事があり、今回の人生でこれを乗り切る事ができなければ、来世また、経験させられるであろう悩みであるからです。

すなわち、自分の傾向性の中にそうした悩みに陥り易い部分があるんですね。ですから、自然とそうした悩みを引き寄せるんです。みすみす自分で落ち込んで行くんです。それを知って欲しいんですね。そして、その原因が何処にあるのか考えて欲しいのです。そして、それを克服するよう努力していただきたいのです。

幸福とはね、こうした悩みや自分の欠点をじっと見つめる作業の向こうにも開けてくるものなんです。決して理想的な方向へまっしぐらに進む方向にしか開けてこないものではなく、相反する方向へ、悲しみや苦しみをじっと見つめ、その底を打ち破ったときにも開けてくるものなんですね。この視点をね、大事にして欲しいのです。誰でも、自分の欠点や失敗を振り返るのは嫌でしょう。できるなら忘れてしまいたいでしょうが、そうした逃避行為は自分をまた再びそうした失敗に陥れる結果しか招かないんです。なぜなら自分にはそうした失敗を犯し易い傾向性があるからです。

だからこそこの問題に勇気を持って立ち向かわなければならないのです。そして、これはあなた自身との戦いであり、あなたの人生の課題でもあるわけです。この課題を乗り越えたときに、幸福という名の満ち足りた感覚が得られるようになっているんです。

ですから、現在の悩みを嫌なものと考えて避けようとしてはいけません。自分により幸福になれるように神様が与えてくれた課題であると受け取って欲しいのです。そしてこれまでの様々な悩みについての話を参考として、あなた自身で乗り切って欲しいのです。こ

うした悩みはあなたにとっては大変な問題でしょうが、世界中見渡せば、いくらでもある問題なんですね。自分中心の身の振り方から離れ、精神的に成長するべきです。もっと大きな視点に立って問題を簡単に処理して行って下さい。

同じ土俵の上に立っていると大変な相手に見えるものですが、もっと高いところから見おろしてしまうと、こんな事で自分は悩んでいたんだろうかと思うだけなんですね。大きな高い視野から物事を見おろしたときにほとんどの問題は大した障害にもなり得ないのです。悟りという事です。神近き心を学ぶ事によって悟りを得、人生を達観して下さい。その時に幸福の扉は開けてくるのです。

これはあなた自身にしかできない事であるのです。幸福とは、自分でその扉を見つけ、神近き心という鍵で開ける作業によって現れてくるものであるのです。

幸福というものは、努力でつかむ事も可能なんですね。与えられた環境、これは私達には変えようがありませんが、しかし、努力でもっとより良くしていく事は今すぐにでも可能なんです。この毎日の絶え間無い努力がやがて輝かしい環境となって現れてくるのです。何もせずに、他人を羨んでばかりいても私達の環境は決して良くならないんですね。

不幸と思われる状態の中に実は、幸福の扉が隠されているんです。自らの傾向性が招いた不幸であるならば、その不幸を克服する事は自分の悪い傾向性を修正する事になるはずですね。今回の人生はわずか数十年ですが、私達には実は永遠の未来が保証されているんです。永遠の生命が一時期、肉体に宿って生きているに過ぎないんですね。それでは、この悪い傾向性は永遠に私達を苦しみの中へ引き入れる事となってしまうのです。今回の人生でこれを克服するという事は、この永遠の未来にまで及ぶ人生を苦しみから解放するこ

とにもなるし、輝かしいものとする事にもなりうる訳です。

この視点を忘れないでいただきたいのです。苦しみから逃れる事だけを考え、逃避の人生を送るならば、この苦しみの人生は永遠にあなたにつきまとう事となるのです。勇気を持って立ち向かって欲しいのです。そして、この立ち向かうべき相手とは他人ではなく、あなた自身の神の子に反する想いなんです。神から頂いた生命に感謝する事無く、他人を排斥してでも自分だけが幸福になろうとする間違った想いなんですね。この誰の中にも必ずある想いと戦って欲しいのです。

私達の悩みのほとんどは実にこの単純な想いから始まっている事が多いんです。他人から見下げられたくない。他人より良い目をしたい。心地よい環境で過ごしたい。こうした想いは、自分を少しでも幸福にしたいという想いが淵源となっているんですね。この幸福を求める性質は誰に出もあるので、ある意味では仕方がないのですが、他人を排斥してでも自分だけが幸せになろうと考えるところに大きな間違いが生じてくるわけですね。

他の人の事など関係無しに自分の幸福だけを考える事は、実は自分自身を幸福から遠ざけている事に他ならないんです。幸福というのは、実は他の人々と強調しながら共に伸びていくときに最高の姿となって現れてくるようになっているんです。これが最高の幸福なんですね。

そのためにはね、まず自らに課せられた人生の課題を解いてしまう事です。そうして人生というものの本質を肌で感じる事ですね。これは、決して偶然が重なり合って展開してくる世界ではなく、合目的的に計画的に展開してきている世界であり、非常に得るところの多い世界であるんです。なぜなら、そのために創られた世界であるからです。偶然、世

界があって自分がそこに生まれたのではなく、私達があってその成長のために用意された環境の一つに過ぎないのです。

故に幸福への扉は誰にでも努力すれば届くところに用意されているんですね。しかし、あくまでもそれを開くかどうかは自分次第であるわけですね。時代や環境が悪いと、その扉の存在自体を気づく事さえできないときもあるでしょう。でも、いつの時代でも、誰にでもその程度に差はあれども必ず用意されているのです。現在、こうした神理に触れたあなたであるならば、この幸福への扉の存在に気づく事は容易であると思います。しかし、これを開く事ができるかどうかはあくまでも自分の想いと行いがすべてを決するわけです。

そのためにこの本は書かれているんですね。人々に幸福の扉の存在を教え、自らの手で開く事を願って書かれているわけです。その方法、手段は千差万別ですし、結果もまちまちでしょう。しかし、今回自分で悟り、決行した分だけは必ず進歩しているわけです。これを信じて欲しいと思います。

第2節　感謝と情熱

幸福な人生を開く鍵とは何でしょうか。色々なものがあると思いますが、現代人にとっては、私はそれを感謝と情熱であると思っています。

まず、感謝という事ですね。これが失われて久しいのです。人々は、自分の、あるいは自分達の利益、快適性を求めて生きており、常にさらなる快楽、もっと多いお金、もっと良い待遇を求めて止みません。つまり、いつ果てるともわからない欲望の虜になっている

んです。次から次へと欲が出て来るんですね。私達は、これを「足る事を知らない欲望」と言っていますが、本当に切りがないんですね。もうこれで満足という事がないんです。次から次へと、もっと良いものが欲しくなるんです。

こうした欲が発明や科学の発展に寄与している面も確かにあるでしょう。もっと優れた物を生み出したいという欲が、努力によって素晴らしい発明を生む場合もあります。こうした場合には、欲は肯定されるべきものでもあるでしょう。しかし、こんな場合はごく希な場合で、ほとんどの場合は単なる物質欲や名誉欲です。そして、こうした欲望は私達を自分の利益だけを求め、他人の事は関心を持とうとしない冷たい人間へと変えていくのです。

すなわち、現代の人々の最大の関心事は自分が良くなる事であり、他人は関係がないのですね。そのために、地位なら地位を手に入れることで頭の中は一杯になっており、他の事は二の次なんですね。そして、この欲望は果てる事がありませんから、いつまで経っても欲望で頭の中を一杯にしているわけです。つまり、自分の欲しい物しか見えていないんですね。

ところが、人間の人生とはそんな価値の無いものでは実は無いんですね。大きな意味があるんです。それは一人一人違いますが、それぞれの人は必ず何かの目標、あるいは課題を抱いてこの地上に生まれてきているんです。たとえば、勤勉に努力する精神とか、明るく周りの人達と調和できる性格とか、様々な精神を得ようと計画的に生まれてきているんです。そして、その人の計画に最も適した環境が選ばれているのです。こうした事実があるんです。

ですから、欲望に翻弄されて一生を送るという事は人生そのものを無駄に過ごしたという事にしかならないわけですね。計画を少しも実行しないで自分の快楽に酔っているわけです。こんな人が死後、どんな世界に行くかははっきりしていますね。今回のような欲望に翻弄された人生を続ける限り、その人に地上の人生による進歩はありませんから、欲望というものがいかにはかないものであるかを痛感するまで体験をさせられるわけですね。つまり、地獄と呼ばれている世界ですね。そして、この地獄から抜ける事ができる頃には欲望の空しさを知っていますから今度こそはと言ってまた地上に生まれ変わって行くんです。

このような生命の循環があるわけです。ただ、現代は余りにも物質的な科学主義に時代が傾いていますから、こうした輪廻転生など信じる人は少数派です。人々は肉体が自分自身と思い込み死んだらすべて終わりだと勘違いしているのです。また、こうした思想が何の抵抗もなく受け入れられているようです。しかし、いつの時代にもこうした宗教があり、人間の輪廻転生や神様の存在を説いていたはずです。宗教が日陰の存在となっている現代が異常な時代なのです。

昔の人々は知性が低いからそうした神やあの世を信じていたのではなく、現代の人々が実験によって証明されるものだけが真実であるという皮相な科学主義に迷わされているだけなのです。実験できない世界、異次元の世界というものに現代科学のレベルでどんな解明が成されるでしょうか。現代の科学ではまだ無理なんですね。現代科学はまだ異次元の存在自体を証明できないんです。これは確かに科学にとっては大きな壁ではありますね。この壁を乗り越えない限り科学の発展はすぐ頭打ちになるはずです。

そういう意味で現代に生きる私達が本来の生き方を見失っているわけですね。宗教を片隅に追いやり、輪廻転生や神を信じなくなったんですね。そうすると、いわゆる動物と同じ弱肉強食の世界になりますね。自分だけが頼りで強いもののみが生き延びるという二本足で立つ動物になり果てるわけです。そして、絶えず他の人との争いに生きる事になります。

これからおそらく奇跡の時代がくるでしょうね。つまり、常識では考えられないような出来事が次々と現れてくるでしょう。そして、現代科学では説明のつかないようなものも多数あるはずです。なぜなら、現代人の科学的に説明のつかないものなど問題外だという思想を打ち崩す必要があるからです。現代科学はまだまだ幼いレベルなんだという事実を認識させる必要があるんですね。そして、人知をはるかに越えた偉大なる神の存在というものを単なる架空の崇拝ではなく、実在の存在として認識する必要があると思います。

神の存在そのものをつかみきる事はおそらく私達には無理でしょう。しかし、そうした存在が背後にはあり、神の意志によって生かされているという事実を伺い知る事はできると思うのです。それも知性的に筋の通った理論として認める事も可能であると思います。ここ百年ほどの間特に流行した無神論を破棄するときが近づいているわけです。そして、神によって生かされている私達は永遠の生命を持ち、この世とあの世を循環して自身の魂を磨いているのだという生命の真実を受け入れるべきですね。

そうすると、まったく世の中に対する見方が変わってまいります。今まで自分は周りに対して警戒し、身を守るべき存在であったものが、周りの人々も自分と同じく神の分身であり、この世に修行しに来ている仲間になるわけですね。当然、関心を持ち、できれば仲

良くなりたい人々になるはずです。周りの人々を敵と見るのか、同胞と見るのかでは精神的には大変な違いがあります。たった一度切りの人生を守るために絶えず警戒しながら生きるのと、永遠の生命の中の一コマとしてじっくりと味わって生きるのとでは雲泥の差がありますね。

ならば、信仰の元に生きるべきです。神によって生かされている存在として、永遠の生命を持つ存在として有限の人生を生きて下さい。死後、本当にあの世があるのか、そうでないのかは死ねばはっきりします。それまでの人生をどれだけ輝いたものとし、どれだけ幸福に生きれるかが最大の問題だと私は思うのです。永遠の生命を心の拠り所とし、人間神の子を信条に他人とつきあえば私達にはもう恐いものはないはずです。自分で納得のいく人生を追求できるはずですね。

こうした人生です。人生とは決して偶然の産物ではなく、自らの意志で歩んでいくものなんです。神の恩恵を受けながら。

ですから、私達が神に感謝する事は非情に簡単な事であるはずですね。すべては神があって始めて存在できる。宇宙も地球も自分も他の人々も。そうすれば、神に感謝の気持ちが出てきて当然です。そして、この感謝の気持ちというものは実に幸福感に近いものなんです。心の底からありがたいなと感じるとき、自分は幸せだなと思いますね。こんな簡単なものなんですね。幸福というのは大金持ちや重要な地位にないと感じられないものではないんですね。何も無くとも、心の持ち方次第で得る事が出きるものなんです。

よって、常に感謝の気持ちを持って人生を歩む事が出きる人は非情に幸せですし、死後も地獄へ行く事は決してありません。霊界という所は心の世界ですから、心の持ち方が住

む世界を規定するんです。常に感謝して穏やかに生きている人はそうした人が住む世界へと引きつけられて行くんです。こうした善人の住む世界が地獄であるはずはありませんね。

ですから、まず感謝です。これを持てるような人間になって頂きたいのです。これが幸福という扉の中に入るという事です。

そして、その次には情熱です。情熱を持って人生を生きて欲しいのです。この時の情熱の対象は人それぞれでしょう。ある人は人生の課題に取り組む事でありましょうし、ある人には理想に向けての努力であるかも知れません。自分で決めてそれに取り組んでいけば良いのです。このようにしていって始めて人生というものが意味あるものとなっていくんですね。ただ単に時間が過ぎていくだけの人生なら大した価値はありません。年月の経過と共に自分の精神が大きくなっていく事が望まれるわけですね。そのために今回の人生を歩んでいるわけです。

こうした感謝と情熱に満ちた人生そのものが実は非情に幸福な人生なんです。最高の人生とは神から受け継いだ輝きを最高度に発揮する人生に他ならないのです。自分を本来の姿で完全燃焼できるという事です。この最高の自己実現の幸福をやり遂げて欲しいのですね。そのためには、この感謝と情熱を信条として生きる事は非情な力となると確信しています。

第3節　幸福への扉

幸福、それは私達にとって希望であり、目標でもありますがこれを手にするのはなかなか難しいのも事実です。なぜなら、私達は自分の幸福な姿というものを胸に描くとき、どうしても形あるものにとらわれるからです。たとえば、豪邸に住み、高級車を乗り回し、会社の社長で、綺麗な奥さんを持ち、多くの使用人を使っているなど形に憧れてしまうんですね。

そして、こうした事を実現していく中にも確かに幸福が存在する事もあるでしょう。自己実現の幸福ですが、しかしこの幸福を得る事ができる人は限られているんです。すべての人がそんな大金持ちになる事などできませんね。そうすると、一握りの幸福な人と多くの不幸者に分かれてしまいます。そして、ほとんどの人が後者になるはずですね。

なぜなら、この世の物はすべて限りがあるからです。お金も物もみんなが満足するだけの量はないんです。

そして、そうしたお金や家などが本当に幸福になるためにどうしても必要な条件でしょうか。お金の無い人はみんな不幸な人々なのでしょうか。こう考えてみると少し違うんじゃないかと思いませんか。お金があまり無くても幸せに暮らしている人はいるはずだし、大金持ちに生まれていても不幸な人だってあるはずですね。すると、幸、不幸を分けるものとはいったい何なのでしょうか。

ここまでは皆さんある程度考えるんですが、この答がわからないんですね。いったい自分はどうしたら幸福になれるんだろうと考えても、考えてもわからないんですね。

それはね、自分の幸福だけを考えているからなんです。他の人の事は何も考えていないからなんですね。何が、あるいは誰が自分を最高に幸福にしてくれるかと考えると答はでません。絶対にわかりません。しかし、どうしたら自分が周りの人達に幸福を与える事が

できるだろうかと考えてみると答は割に簡単にでるんです。なぜなら、自分にできる事など限られているからです。自分にできる事で周りが一番喜ぶ事をしようと考えると答はすぐ出ます。

しかし、それでは周りの人達の幸福であって自分の幸福とは関係がないではないかと言われる方も多いでしょうね。でも、そう思うならそれは幸福というものを知らないからです。幸福とはね、与えられるものではないんです。実際に神様はね、私達人間全部の幸福を願っておられるんですが、しかし現実には不幸な人は必ずいますね。これは何故かと言うと、究極の神様でさえ私達に幸福そのものを与える事は出来ないんです。ましてや、他人や物によって幸福を与えて貰う事など無いと言わざるを得ません。もちろん、幸福のきっかけとなる事は出来ますよ。しかし、幸福そのものは貰う事は出来ません。

なぜなら、私達人間は神様から完全な自由を与えられているからです。自由である以上、強制的な束縛はないわけですね。私達は幸福になる自由も不幸になる自由もあるわけです。どちらを選ぶかは私達自身の選択によるわけです。だからこそ、幸福を選択できるようにならなければならないのです。わざわざ不幸を選択する事などバカげていますね。でも、こんな簡単な事がやってみなければわからない人が多いんです。そして、自分では一生懸命に幸福を求めているつもりでも、結果的に不幸になっていく人が後を絶ちません。それは、考え違いをしているからです。幸福は貰う物ではないんです。

与えていくうちにその与えた幸福のうちのいくらかが自分に帰ってくるものなんです。ですから、多く与えられる人ほど幸福が帰ってくる量が多いと言えます。でも、この与え方は物だけではいけません。あくまでも、心です。相手を少しでも幸せにしてあげたいと

いう愛の気持ちですね。これが様々な形で現れるだけなんですね。

幸福を奪おうとする者は奪われ不幸になり、逆に幸福を与えようとする者は与えられ幸福になるんです。こんな神様の創られた法則があるんです。幸福への扉を開く鍵は誰の心の中にも既に与えられているんです。それは、愛の力に他ならないんです。私達人間がこの地上で他の動物や植物の上に立ち彼らを支配する事が許されている理由はこの愛の力を持っているからなんです。愛とは非情に神の本質に近いものなんですね。人々を結び付け、様々な障害を断ち切り、大いなる調和を築く力なんです。この力は他の動植物には持ち得ないわけです。

この愛の力を発揮するときに、人間は単なる人間ではなく、神の一部がそこに現れたかの如く輝き出すのです。そして、その輝く自分を発見する事こそ最高の幸福であるわけです。

ならば、愛を与える事です。愛は与えれば与えるほどに自らを輝かせ人々を潤し、周りに調和を生み出すのです。そして、そうした環境は自分自身を幸福にしてくれるわけです。

「愛を与えなさい。」もう二千年も前にイエスキリストが言った言葉です。今、この言葉の復活が求められているんです。そんな自分自身の小さな利益に目を奪われていてはいけない。そんな些細ないさかいに心を乱して他人を恨んでいてはいけない。この世限りという悪魔のささやきに耳を傾け、すさんだ生活を続けていてはいけない。神を忘れ、永遠の生命を知らず、他人の幸福を奪う事ばかりに奔走していてはいけない。そして、当然の報いとして自分が不幸に陥っていくのをどうする事も出来ず嘆いてばかりいても物事は少しも解決しない。

今こそ、目を開いて世界を見渡しなさい。そこにもここにも広がっているのは神が私達のために用意された花園である。この花園を花園である事にも気づかず、平気で踏みにじっているのは誰なのか。他ならぬ私達自身ではないのか。それを自分の胸に問うてほしいのです。神に自由を与えられた事をいい事に、いたずらばかりして、争い合っていてはいけないんです。私達はすべて神の分身であるのです。

周りの人々に関心と愛を持ち、自らの利益だけを求めるのではなく、他人と調和し、できるだけ他人に尽くし、愛を与えて生きてみて下さい。その時に幸福への扉は開くようになっているんです。そして、その幸福の道のりは限りなく神へと続く道でもあります。神に見守られながら一歩一歩確実に進んでいって欲しいと思います。